

二〇〇二年一月

東京

河上會會報

No. 74

東京

河上會會報

No. 74

題字 末川 博氏

事務所 千〇三〇三三 東京都中央区日本橋室町四五
(近三ツル) 高木法律事務所内

會報編集部

電話 振替 千〇三〇三三
電話 〇〇二〇一五
東京都新宿区早稲田鶴巻町五三
(株)藤原書店内

電話 〇三(五二七)〇三〇一
(頒価一〇〇〇円)

河上肇のことば (27)

放翁鑑賞その四——八十四歳の放翁

一年老一年 一年は一年より老い、
 一日衰一日 一日は一日より衰ふ。
 譬如東周亡 譬へば東周の亡ぶるが如し、
 豈復須大疾 豈に復大疾を須むや。
 懶惰已廢書冊久 懶惰已に書冊を廢すること久しく、
 病來亦復疎盃酒 病來亦た復た盃酒に疎し。
 軻車小住固自佳 車を軻めて小住す固より自ら佳、
 拂袖便行亦何有 袖を払うて便行す亦た何か有らむ。
 下床擁火暖有餘 床を下りて火を擁す暖余りあり、
 鹹豆數粒粥一盂 鹹豆數粒、粥一盂、
 平生常笑愚公愚 平生常に愚公の愚を笑ひしも、
 欲裁墮齒染白鬚 墮齒を裁え白鬚を染めむと欲す。

【河上肇全集】第二〇卷、「陸放翁鑑賞」四〇七—八頁

目次

河上肇のことば (27)	1
一、公開シンポジウム「近代日本思想再考——河上肇の位相」4 「コミンテルンと河上肇」……………	2
荒川幾男・加藤哲郎・飯田泰三・古田光 (コーディネート) 住谷一彦	
一、新渡戸稲造と河上肇 …………… 住谷一彦 ——日本農政学の系譜——	34
一、河上肇のジャーナリズム …………… 田中秀臣 ——福田徳三との国民経済論争を中心に——	53
一、会員通信 ……………	65
一、事業報告 ……………	69
一、決算報告・事務局だより ……………	70

コミンテルンと河上肇

(基調報告)

荒川幾男

加藤哲郎

(討論)

飯田泰三

古田 光

(コーディネーター)

住谷一彦

第一部 基調報告

司会 これから二〇〇〇年度の東京河上会の公開シンポジウムを始めさせていただきます。この公開シンポジウムでは、三年前から「河上肇を軸にして近代日本思想を見直す」ことをやっております。本日はその第四回で、全体的なテーマは「コミンテルンと河上肇」ということで、基調報告を荒川幾男、加藤哲郎の両先生、討論者に飯田泰三、古田光先生、コーディネーターは住谷一彦先生にお願いしています。まず、住谷先生の方からよろしくお願いいたします。

住谷 きょうは雨が降っている上に寒い中、おいでいただきまして大変ありがたく思っております。先ほどありましたように、この公開シンポジウムは第四回目を迎えました。近代日本における知の光芒ということで、年代をある程度分けて催してきたわけですが、今回は一九三〇年代に焦点を当てて考えてみようということになりました。その前の一九二〇年代も取り上げたいわけですが、私たち東京河上会の河上先生の生誕一二五年ということもありまして、一九三〇年代に河上先生が奮闘して、いろいろな激動の時代の問題を取り上げられていたプロセスに焦点をあてるということになったわけです。河上先生は既にその前に『社会組織と社会革命』の中でロシア革命の問題に触れておられまして、そこでの河上先生のロシア革命論は非常に今から見ても興味深い論点を提起しておられます。私たちの納得のいく内容が多々見られるわけですが、河上先生がその後、

どういふ思想の軌跡をたどられて自らの学問的な枠組をおつくりになつたのか。そのときの河上先生のソビエトに対する目線は一つの私たちの関心でもあります。

きょうは、そういうわけでお二人の講師の方をお招きいたしました。当時の時代の一つの極であったコミンテルンと河上先生のかかわりを少し探り出してみたいと思います。時代はちょうど一九三〇年代、ドイツはワイマル共和国の末期、ソビエトはスターリンの大粛清が始まる。舞台はベルリンとモスクワというところに脚光が向けられます。ドイツの中でも特に、既にナチスが台頭し、歴史の動向を決定するぐらいの勢力にまでなっておりますので、それをめぐる国際的な社会主義運動にもさまざまな潮流が出てまいります。

きょうのお話の中にかかわってくることで言えば、ベルリンにはコルシユがおりましたし、フランクフルト社会研究所が設立されてそこにはグリュンベルクとかウィットフォージェルとか、あるいはエーリ・フロムとか、一時的にはルカーチも顔を出すとというような形で、きょう、荒川先生がお話しくださいます。「フランクフルト学派」と呼ばれる新しい思想の潮流が出てくる。そういうわけで、この流れと別にベルリンのコルシユを中心に、また一つのドイツ共産党の流れの中で在独日本人の会がつくられます。加藤先生がきょう、お話しくださる中に出てくる国崎定洞もその最有力者だったわけですが、このドイツ共産党の流れと、フランクフルト等々のドイツの新しい社会主義の流れというものが今言つた情勢の中でも、今日に至るまで尾を引いているという状況があります。

そういった中で、私たちが非常に興味深いのはきょう、お手元に加藤さんがつくられたリストがありますけれども、このリストを見

てわかりますように、日本の当時の代表的な知識人の名前がたくさん見えて、私の父（住谷悦治）の友人もその中にたくさん入っています。そういう方たちがそれぞれ当時の流れの中で、興味深い役割を果たしていくことがわかります。私の関心から行きますと、そういう中で国崎さんたちの流れと、ベルリンにおりました新明正道さんたちの流れの間の、幾つかの思想的な葛藤、その結果として出てくる政治的な葛藤も彩られてくるわけで、時局の臨在感が私たちに迫ってくる、非常に重要な時期でもあつたようです。

もう一つ言いますと、この流れの中でフランクフルト学派に近いところにおりましたのが平野義太郎さん。平野先生は講座派のリーダーです。きょうのお話に出てくる河上肇がベルリン・グループの国崎さんとコンタクトをとつて著したのが、有名な「一九三二年テーゼ」というものでありまして、これが当時、岩波書店が出した「日本資本主義発達史講座」と結びつくところは多分にあるわけです。この「発達史講座」に書かれた人たちの流れを私たちは「講座派」と呼んでいますが、その講座派とそれに対抗する批判グループが、「労農派」。講座派と労農派は今、国際的に通用する批判用語になつております。私たち、戦後、社会科学の研究を始めたものにとつてもこの講座派と労農派の問題は避けて通れないテーマでした。

そういうことを考えますと、きょうのお二人の話は時代は一九三〇年代ということですが、現代的な問題のいわば源泉を示すようなところがありまして、問題そのものは依然として私たちの前にあるという観を深くしております。時間がございませぬので、早速お二人の講師の方からお話を伺わせていただきますと思います。最初に荒川先生からお願いたします。

一九二〇～三〇年代の社会思想の諸潮流

——フランクフルト学派など——

荒川幾男

二〇世紀思想の淵源としての戦間期

一九二〇年代から三〇年代は、言うまでもなく第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の二〇年間ですが、その間にあらわれてきたいろいろな思想の潮流にはどんなものがあつたのか、それがどんな展開を見せたのかについて、思いつくままに少しお話しをしてみたいと思います。

最近ではいろいろな新しい資料が出てまいりまして、後でお話がございませう。コミンテルンと河上肇の書簡の問題もそうですが、新しい資料があらわれてきますと、今まで考えていたのとは違つた観点が当然出てくることになるわけで、そういう意味では現代は、一九二〇、三〇年代も含めて、いろいろ新しい観点での検討が要求されておられ、それこそ社会思想とは何んだということも、改めて問い直されなければならぬということであらうかと思ひます。

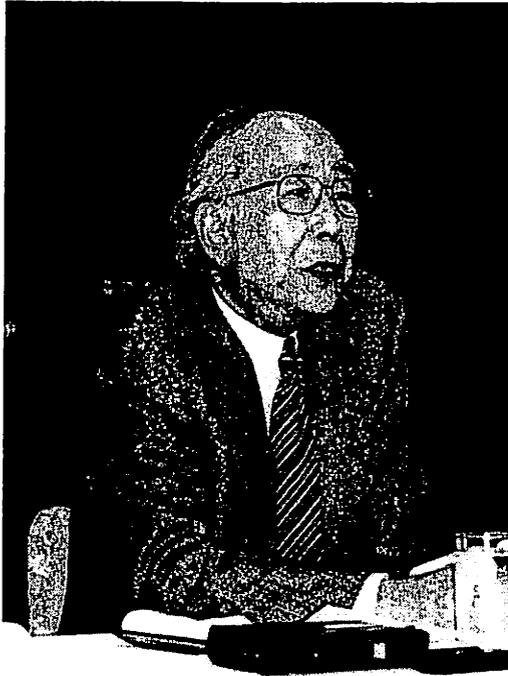
さて、この戦間期の二〇年は、いうまでもなく、それまでの一九世紀末のいろいろな思想や秩序の崩壊が決定的になつた、一九世紀が完全に終わったということであるのと同時に、そうしたものを踏まえた新しい模索が出てきた時期でもあります。その結果は、この時代につくり上げられたのではなくて、四〇年代以降、特に五〇

年代から六〇年代によくその試みが形を取り得たと見ることができると思ひます。したがひまして、そのことは別の言い方をすれば、二〇世紀思想全体についてのパースペクティブを用意しなければ、二〇～三〇年代の意味を本当にとらえきえることは恐らくできないだらうと思ひます。

ヨーロッパがいろいろな現代の思想問題のいわば先導者であつたことは改めて言うまでもありません。そのヨーロッパの二〇年代、三〇年代の社会思想の新しい試みは、大きく分けてマルクス主義と大衆社会論が注目されます。

それまでの第二インターにかわつて出てまいりました、ロシア革命以降の国際的な組織としてのコミンテルンを中心にして展開したマルクス主義のいろいろな流れがまず注目されなければなりません。そのマルクス主義の中には大きく分けて二つの潮流が出てくることとなります。一つは言うまでもなくコミンテルンを中心にしたソビエト・ロシアでの動きです。そして、いろいろな意味でソビエト哲学、ソビエト・マルクス主義の展開が、他の国々のマルクス主義者に大きな影響を与えたわけです。

それに対して、もう一つの西欧マルクス主義、ヨーロッパ・マルクス主義と言われるようになった潮流が、この時期に始まつてきます。これはジェルジ・ルカーチが始まるといわれるもので、彼の『歴史と階級意識』という本が出たのが一九二三年のことで、これが大きな影響を及ぼすことになる。しかし、その影響は、直ちに目に見える形で急速に伝播していったというわけではない。この時期にはいろいろな形で同じような問題意識が出てくるということができるわけで、むしろ西欧マルクス主義の展開が本格化したのは、一



▲荒川幾男氏

九五〇年代以降であったと考えられます。

ルカーチとは何だったかということについても、いろいろと議論されなければならないでしょうが、非常に簡単に、誤解を恐れず一言で言えば、それまでのマルクス主義が、政治・労働運動の主導的な思想として、哲学を排除して、科学的な社会主義への道を明示できるような、経済学を一番基本的な解剖学として社会を解釈しているという動きだったのに対して、それにとどまらない、マルクス主義の再哲学化を目指していたと言うことができるだろうと思います。その軌道の上に西欧マルクス主義が展開し、今日「社会思想」の対象と方法の根本的問い直しも不可避の現代的課題となるのです。ルカーチはハンガリーのブダペストに生まれ、ドイツで学び、ウエー

バー・クライスといわれるマックス・ウエーバーのサークルに出入りして、大きな影響を受けていました。その後、一九三〇年代が始まるころになりますと、コミンテルンを中心としたデボリン派といわれる人々によるソビエト哲学の新しい展開によって、自分での立場を否定してしまうことになるわけです。

マルクス主義の多様な展開

このようなマルクス主義のソビエト・マルクス主義ではない西歐的な展開は、もちろんルカーチだけによって担われたのではなくて、いろんな形でこの時期に出てきます。その最も大きな意味合いを後に持ったものの一つに、「フランクフルト学派」と呼ばれるようになったグループがあります。これが何であったのかについては、これからまだ議論がいろいろと展開されることになろうかと思えます。

第一次世界大戦が終わり一九二〇年代に入ると、フランクフルト大学でいろいろな新しい学問に門戸を開く動きが出てきます。それまでのドイツの大学は、「クルトウアトレーガー（文化の担い手）」を自負する権威的なアカデミーであり、新しい学問的な試みに容易に門戸を開かなかったのですが、フランクフルト大学は一九一四年に創立された新しい大学であっただけに、特に戦後はいろいろ新しい講座を開くことになったわけです。

例えば、「社会心理学」という名前の講座は世界でも最初に、フランクフルト大学に開設されたものでして、これはヘンドリック・ド・マンが担当します。彼はベルギー人で、当時フランクフルトに来ており、『社会主義の心理学』という著書もありました。彼はマルクス

主義者ですが、その人がこの講座を開いて、フランクフルト大学のプロフェッサーになるわけです。

また「社会哲学」という名前の講座も初めて開かれ、マックス・ホルクハイマーがその教授に任命されますが、ホルクハイマーはフランクフルト学派と呼ばれるグループの中心になります。

このような雰囲気なかで、ユダヤ系のヘルマンとフェリックス・ワイル父子が基金を出して、フランクフルト大学に付置された研究所をつくるということで、いろんな人を集めます。こうして「社会研究所」という名の研究所が出来ます。最初はオーストリアのマルクス主義経済学者でありましたグリュンベルクという人を所長に迎えて出発する。一九二〇年代初めのドイツ・マルクス主義の熱気がこれを支え、いろいろな人がそこにかかわってくることになるわけです。

ホルクハイマーがこの研究所を本当に主導するようになるのは、グリュンベルクが亡くなりまして、ホルクハイマーが所長になった一九三一年以降のことです。しかし、御承知のとおり、一九三三年になりますとヒトラーが権力を握って、ユダヤ系のこれらの人々は亡命しなければならなくなる。彼らはスイスを経て、アメリカに渡りまして、コロンビア大学とのつながりを持ちながら、社会研究所をアメリカで更に続けようということになります。そこで、最初からこの研究所の中心的なメンバーになっていたホルクハイマー、アドルノ、マルクーゼというような人たち、さらにはエーリヒ・フロムなどがそこに入ってくる。

この人たちの探求は、マルクス主義の中にいろいろな新しいものを取り入れる。心理学、精神分析、あるいは社会学というような

ろいろな形で展開しておりました学問を取り入れながら、もう一度マルクス主義を整えなおす努力をするわけです。しかし、三〇年代以降になりますと、政治とのつながりを失う。特にアメリカに参りましてからは、政治とのかわりを全く断ち切る形で活動するため、プロレタリアの解放運動とは直接には関わりのない展開を示すことになります。

さらに、西欧マルクス主義は、フランスに移りますと、第二次大戦後、サルトル、メルローポントイといった人たちによって受け継がれ、展開されることになります。それは、もはやマルクス主義と言えるかどうかは、もちろん別に問題になりますが、西欧マルクス主義を抜きにしては彼等の思想を考えられません。現代の社会思想の再検討に大きな影響を与えているミッシェル・フーコーも同様です。いずれにしましても、二〇年代、三〇年代を通じまして、日本ではコミンテルンのソビエト・マルクス主義の影響が圧倒的ですが、西欧での展開と比較しつつ再考しなければなりません。

大衆社会の認識

二〇年代、三〇年代を考える場合に、マルクス主義とともに、もう一つ注目しなければならないものに「大衆社会」といわれる社会認識のさまざまな展開があります。これについて大きな役割を演じたのは、カール・マンハイムですが、マンハイムもまたブダペストに生まれて、ドイツで学び、ルカーチと同じようにマルクス主義とともにウエーバーの影響を受けます。ルカーチもマンハイムも第一次大戦後のハンガリー革命にコミットして、それに敗れて再びドイ

ツに逃れることになるわけですが、マンハイムはフランクフルトで社会学の講座の教授になります。一九三〇年のことです。間もなくヒトラーが出てまいりますと、彼もイギリスに亡命することになります。そこで『変革期における人間と社会』などで、『産業大衆社会』という概念を提起し、新しい考え方をさまざまに展開します。

マンハイムの基本的な考え方は、簡単に言いますと、人間の持っているいろいろな能力の中で、技術的な能力と、精神的・文化的、あるいは道徳的な能力と分裂分離が極めて大きくなり、またそういう能力を持つている人と持っていない人との違いが非常に大きくなって、こういう状況が社会の変質をもたらしているという認識でした。こういうマンハイムの考え方は、やがてマルクスとウエーバーの影響を受けた多くのドイツの学者が、一九三〇年代に入つてアメリカに亡命するとアメリカに移し植えられます。マンハイム自身はずつとロンドンにとどまったわけですが、その他のいろいろな人たちがアメリカに行く。そういう人たちの中の、例えばエミール・レーダーの『大衆の国家』という著作は、ナチズムの分析ですが、そこで大衆が大きくクローズアップされるきっかけをつくった。レーダーがアメリカに亡命するについては、ニュースクール・フォー・ソーシャル・リサーチ（新社会研究学院）を創設したアルヴィン・ジョンソンが亡命大学と呼ばれる大学院の機関をつくり、そこに彼を招聘し、レーダーを中心にして、いろいろな分野のドイツの亡命学者が集まった。この学院はヨーロッパの二〇年代、三〇年代の新しい試みをアメリカの社会に移し植えて、それを花開かせる上で大きな役割を果たすことになったわけです。

もちろん、ウエーバーの思想は、アメリカ生まれの学者たちによつ

ても受け入れられまして、ドイツからの亡命者と一緒になって、五〇年代以降、アメリカ社会学は「世界社会学」という言葉で呼ばれるほどの大きな役割を演ずるようになる。そうした中で、例えばアドルノ、あるいはウイーンから参りましたパウル・ラザースフェルト等々、亡命学者を中心として社会心理学的な「権威」の研究をはじめ、大衆文化、大衆社会の批判的な探求が行われることになりました。以上のような二〇年代、三〇年代の、ウイーンを含めたドイツ語圏の思想がアングロアメリカ世界と交錯して、二十世紀の社会思想の転換を用意するのです。

社会思想の根底にあるもの

さて、この二〇年代、三〇年代は、ドイツの哲学でいえば、現象学やハイデッガー（二七年に『存在と時間』を世に出す）が一九世紀以降の認識論を大きく変えるわけですが、社会認識の面でも大きく変ります。一つ例を見ますと、ウエーバーも指摘しておりますように、単に、階級状況（クラッセンラージュ）としてだけ社会を見るのではなくて、ドイツの社会においてはクラッセンラージュと同時に、シュテンディシエラージュ（身分状況）としてもみなければならぬという問題意識です。「身分状況」というのは、ユンカー等の貴族の問題ではなく、学歴、大学教育を受けたということ、別の言い方をすると、ビルドゥング（教養）を持っている、つまり教養人、ゲビルデーテがドイツの社会においては特別な意味合いを持っているということなんです。これが官僚となり、新しい近代産業の担い手にもなつて、ドイツの急速な一九世紀末以降の発展があつた。それが危うく

されてきた状況が、一九世紀末から大戦前にありました。日本で日本の近代的学問を大きく前進させる基礎を与えた人の一人に、ケールという人がいます。明治二六年に日本に来まして、哲学を教え、西洋の哲学をギリシア・ローマの古典からちゃんと勉強しなければいけないというので、多くの人がこれに影響を受けた。このケールを井上哲次郎の依頼で日本に行くように紹介した哲学者は、当時ドイツで非常に流行していたエドワルト・フォン・ハルトマンという人ですが、このハルトマンが一八九六年に『ターゲスフラゲン（時事問題）』という本を書いている。ちょうどドレフュス事件が隣の国のフランスで起こったところですが、その本の中で、隣のフランスでは既に世襲の貴族、富による貴族、教育による貴族が、賤民どもによって脅かされている。ドイツにおいても教育による貴族（精神貴族）であるクートウアトレーガー（文化の担い手）が下剋上で危うくなっていると書いています。ですから、第一次世界大戦前から一九二〇年代にかけて、「ドイツ的教養とは何か」という議論がいろいろな形で行われることにもなります。

このような構造をもったドイツ文化が、日本には明治三〇年代以降に導入される。河上肇の場合には、彼の青年期にはまだドイツの影響よりも、明治初年以降のアメリカを通じてのイギリスの文化の影響が大きい。それはドイツ流の教養人に対してジェントルマン（紳士）と呼ばれるものをいわば身分状況としてもっている。そのユニテリアン、キリスト教的な文化、それに伴ってまいりましたソーシャリズムが彼を一番養ったものであると考えてみる事ができます。それがあつたからこそ彼は、後々求道者と呼ばれたようにドイツ的教養ではないイギリス流のクリスチャン・ジェントルマンの思想土

壌の上で、マルクス主義を受け入れることにもなるうかと思わわけです。

社会思想を考える場合に、単にだれがどう言ったか、あるいは政治的経済的な動きがこうだったということだけではなく、その背後で人びとが社会についてもっていった基本的なイメージ、それを支えていた習俗的なレベルでの規範意識と人間についてのイメージを探る必要があります。そこで例えば、ドイツならば「教養人」あるいは「クートウアメンシュ（文化人）」、イギリスでは「ジェントルマン」、フランスならば「フィロソフ」からさらに「アンテレクチュエル（知識人）」というようなイメージを手掛りにすることができきます。こういうイメージが社会思想の根底にあつてこれを支えているとも考えられます。そういう見方でいろいろと社会思想をみなおしてみる必要があるうかと思えます。

新発見の河上肇書簡をめぐって

——国崎定洞と河上肇——

加藤哲郎



▲加藤哲郎 氏

一橋大学で政治学を研究している加藤と申します。河上肇の専門家ではもちろんございません。たまたまこの間、モスクワに通いまして、河上肇に関する新しい資料を見つけ、法政大学の『大原社会問題研究所雑誌』四八〇号（一九九八年十一月）に「モスクワで見つかった河上肇の手紙」という論文を書きましたので、きょうはこ

ちらに呼ばれたのだらうと思います。本来の専門からいえば、本当はアドルノ、ホルクハイマー、ベンヤミンなどの話もしたいところですが、その辺は一切禁欲いたしまして、河上肇とコミンテルンの直接的関係について、お話ししたいと思います。

そのように申しますと、河上肇『自叙伝』の中で、彼自身が書いてあるコミンテルンとのつながりが前提になります。先ほど住谷先生からお話がありました「一九三二年テーゼ」、一九三二年の五月二〇日にコミンテルン機関紙『インプレコール』に出ましたテーゼを、河上肇は、ドイツにいた国崎定洞という人から受けとって、それを自分で訳して党中央に提出した、というくだりがあります。これは実際にはそうではなかったのですが、テーゼの日本語訳は「本田弘蔵訳としてあつた筈だ。本田弘蔵、これが私の地下の党名である」と『自叙伝』に書いています。「一九三二年テーゼ」の翻訳者としての河上肇というのが、『自叙伝』から直接引き出されるコミンテルンとの関係です。

そのほかに、河上肇は大山郁夫らと新労農党結成に加わり、一時は共産党と対立する関係にあつたのですが、それを自己批判して新労農党を解散し、日本共産党に近づいていく時期に、モスクワの片山潜から手紙をもらったとも書いています。正確に言うと、一九三二年九月に河上は日本共産党に入党するのですが、それまでの時期にコミンテルンとの関係、より正確には日本支部Ⅱ日本共産党との関係を密にしていたと、『自叙伝』では述べています。ただし、モスクワのコミンテルン本部と直接つながっているのではなく、ドイツを中継地にしていたようです。このあたりですが、大体一九九一年、つまりソ連が崩壊するまで知られていた河上肇とコミンテルン

表 ナチスに抵抗した日本人：ベルリン反帝グループ関係者一覧

(川上武・加藤哲郎『人間 国崎定洞』勁草書房, 1995年)

生没年月日	渡航前	渡航後・戦後
ベルリン社会科学研究所) 26年未からの在独若手知識人のマルクス主義読書会。	渡航前	渡航後・戦後
有沢 広巳 1896-2-16-1988-3-7	二高、22東大・24助教	東大経済学、38・2労働派検挙、東大教授、日本学士院長
堀江 昌一 1896-12-18-1991-11-24	22京大・河上肇、24高松	統計学、経済学、38・2労働派検挙、東大教授、57日ソ協会
嶋山 政彦 1895-11-21-1980-5-15	一高、20東大・新人会	34検挙、40歳検閲査部、検挙、45共産党入党、57日ソ協会
谷口 吉彦 1891-3-24-1956-12-12	22京大、和歌山風商	東大教授、行政学、39平賀康子辞任、54お茶の水女子大学長
国崎 定洞 1894-10-5-1937-12-10	一高、19東大・24助教	33京大教授、経済学、53大阪大学教授、55香川大学長
山本 勝市 1896-3-20-1988-8-1	23京大、和歌山高商	32・9モスクワ亡命、33フートベ、37・8・4逮捕、12-10脱獄
舟橋 祥一 1900-5-31-存命	24東大法	和歌山高商教授
菊池 勇夫 1898-6-21-1975-7-13	22東大法	31-32再逮捕、32国民精神文化研究所、46自民党代議士当選5回
山田 勲次郎 1897-10-7-1982-6-7	22東大、25京大助教	30九大教授、64名譽教授、法政大学教授、労働法
岡上 守道 1890-1-28-1943-4-28	一高、16東大・新人会	31フロ科、講座派、戦後共産党入党、64検名、嶋山政彦弟
鈴木 東民 1895-9-25-1979-12-14	二高、22東大・朝日	別名黒田礼二、大阪朝日風説特派員、34-36再放後日社旬刊
高野岩三郎 1871-10-12-1949-4-5	1895東大、03-19教授	所長、28日本大検定、46社会党創立、46NHK会長
松山 貞夫 (有沢回想)	22東大、23福島高商	23・4-33-2福島高商教授、33全協事件検挙免職
横田喜三郎 1896-8-6-93-2-17	22東大法、24助教	東大教授、国際法、60-66最高裁判所長官、81文化勲章
黒田 覚 1900-2-1-90-12-2	23京大法、25助教	30教授、京大教授、46追放、53都立、63専修、65神奈川大教授
八木芳之助 (堀江回想)	21京大法、26助教	京大経済学、34-44京大教授、41-43経済学部長
本島 某	高松中卒	26-28
岡内 順三 1907-5-12-53-1-10	21東大経、23助教	27-3-33-2
土屋 喬雄 1896-12-21-1988-8-19	早大中退、築地小劇場	27-4-29-7
千田 是也 1904-7-15-94-12-21	一高、27東大・新人会	27-5-31-11
与野野 讓 1903-1934?	一高、21東大、23助教	27-6-34?
平野 義太郎 (岡内調書)	27-28?	27-12-29-11ヲカヲカ
山形 太郎 (岡内調書)	27-28?	27-28?
山田 一三 1898-1970	22東京高師、佐賀高	26-29
勝野 金枝 1901-4-9-84-1-13	早大、24、ハナ、大、別名林	28-2-28-3訪問
堀川 虎三 1897-2-24-1981-2-27	23京大法、27助教	28-4-30-3
衣笠貞之助 1896-1-11-1982-2-26	俳優・空想映画	28-6-30-5
岡田 森三 1903-6-15-83-9-1	21-24留學	29夏訪問
新明 彦道 1896-2-21-1984-8-20	四高、23東大・新人会	29-4-31-4
服部英太郎 1899-1965-12-20	三高、22東大・福田ゼミ	30-4-32-3
杉本 栄一 1901-8-9-52-9-24	22東大・福田ゼミ	29-5-32-3+一他
大熊 信行 1893-2-18-1977-6-20	21東商大福田ゼミ	30-7-31-9
ベルリン反帝グループ) 28年7月国崎KPD入党後の左翼グループ、国際反帝同盟	一高、19東大・24助教	26-10-30-9
園崎 定洞 1894-10-5-1937-12-10	高松中卒	27-3-33-2
岡内 順三 1907-5-12-53-1-10	早大中退、築地小劇場	27-5-31-11
千田 是也 1904-7-15-94-12-21	23東大経、法大教授	29-2-31-4独仏
三宅隆之助 1899-10-20-1982-4-15	二高中退、別名コバ	29-9-33-2、ハナヲル
小林昭之助 1908-7-6-42-2-25	25慶應院、三田文学	29-10-33-12
勝本清一郎 1899-5-5-1967-3-23		

島崎 蕨助	1908-12-17-92-3-11	明治学院、川端画学校	29-10-32末
根本 辰	1904-1-10-38-11-24	28京大文、無産者新聞	28末-30-9
根森 成吉	1892-8-28-1977-5-26	16東大、文芸春秋	30-1-32-5
山口 文敬	1902-1-10-78-5-19	東京高工付、創字社	30-12-32-6
山西 葵一	1899-6-5-1984-6-22	21広島高師	31-2-31-訪問
和井田一雄	1911-11-10-58-3-29	31一高、東大、別名南	31-6-33初
小栗藤太郎	1906-3-24-67-2-17	半田中卒、労働者	31-7-33-2
佐野 博	1892-5-14-66-9-29	浦高、28東大、新人会	31-9-32-10
三夜 博吉	1892-5-20-1963-11-9	五高、22東大、27成蹊	31-10-32-3
八木 誠三	1909-5-15-?	30超路高、別名石村	31重-33
相澤瀧太郎	1907-11-2-93-2-23	29東大経中退、パリ大	31-6-33初
安達鶴太郎	1906-10-13-89-10-29	一高、31東大、新人会	31重-33-3
井上角太郎	?-1967	北海道出身?	31?-33-3
喜多村 浩	1909-11-21-存命	一高中退、別名西村	31重-33-3
小林 義雄	1909-1-20-95-1-7	三高、30東大	31-8-32-6
野村 平爾	1902-6-1-79-1-22	26早大法、別名東条	32-2-33-10
千足 高保	1910-8-21-80-12-24	30東京外語属語	32-5-45末
大野 俊一	1903-1-29-80-3-26	27東大独文、パリ	32-5-33-10
大岩 誠	1900-7-8-57-1-11	26京大、別名三田	32-6-32-7訪問
岡部 福造	1903-4-1-35-5-11	26東大独文、26山形	31-6-33-3
畑田 正勝	(小栗綱書)		3?-32-7
土方 与志	1898-4-16-1959-6-4	22-23独留学、築地小劇場	33-5-訪問
<パリ>カヌヅル<ア> 31年末からの在巴里芸術科学友の会(CAASP)			ベルリ
船野滿州雄	(ベルリソ)		30-6-31-6-パリ大
大岩 平爾	(ベルリソ)		30-5-33-1-9-1944x2
野村 平爾	(ベルリソ)		31-8-32-2-パリ
佐野 碩	(ベルリソ)		32-1-パリ訪
和井田一雄	(ベルリソ)		32-3-パリ訪、33-36
大野 俊一	(ベルリソ)		31-4-32-5、33-10-35-3
佐藤 敬	1906-10-28-78-5-8	31美術、プロキノ、ナツア	30-10-34-6-パリ
内田 巖	1900-2-15-53-7-17	26美術、光風会	30-9-32-4-パリ
吉井 忠雄	1903-11-27-存命	24京都高等工業	30-9-32-10-パリ
宮永 豊一	1904-3-6-存命	29美術、二科会	29-11-32-パリ
坂倉 敏三	1902-9-18-80-6-4	26東大美術、29学習院	31-33-パリ
平田 文夫	1901-5-29-69-9-1	27東大美術	29-8-36-4-パリ
土方 与志	1899-4-2-1968-8-11	18三高、21東大理	30-5-32-3-パリ
わざまし	1908-11-18-86-4-1		33-5-パリ訪問
<ベルリソ>ア> 日本人と共に革命的ア>人協会			33-4-7-パリ訪問
文晋	1914-91-2-18	モスコワ孫中山大	27-31
炳南	1910-88-12-22		28?-32?
承志	1908-9-25-83-6-10	東京生、早稲田中退	28-11-32初
仿吾	1897-7-16-1984-5-17	10東大、創造社	28-31-9
肇	1905-56-2	京城大法	?-33?

フロレリア美術	藤村3男、画家、蘭本に同行、「蘭」の三郎モデル
哲学生モスクハ	30モスコワで逮捕、追放、地方行政学会、山根銀二義兄
ナル委員	作家、32ソヴェト友の会、49共產党入党、72日本国民教育協会会長
建築家	別名岡村牧象、グロペウス事務所、53RIA建築総合研究所
翻訳者	35までイギリス留学、38-50成蹊高、トロツキー、トイチャー翻訳
ベルリソ大哲学生	33パリ、36帰国、38-46外務省情報部、49東京理大助教、松本文学
ベルリソ大學生	風養塙、32ソヴェト友の会、40執筆、45共產党入党、原水禁運動
演出家	モスコワでマイエルホリドに師事、37パリ、米・39マキッコ命運動活動
成蹊高編入	哲学者、32渡俄、33拘禁、46明大、鎌倉アカデミー、53横浜南大、61字長
ベルリソ大哲学生	有沢の紹介で渡独、41小栗事件執筆、名古屋で実業家
ベルリソ大學生	ベルリソ大學生 33梵壳、36中国、39ベルリソ特派員、政局長、戦後編訳委員、ギンズ賞
ベルリソ大學生	36同盟通信ベルリソ通信員、戦後時事通信政治部長、編集局長、取組員
ベルリソ大學生	38ソソフ、38頃7月カヌヅル、日米関係、特許時評、北米新聞、朝日ニエマコ通信員
ベルリソ大哲学生	38外務省嘱託、54マスコ連盟協会、57慶大、70成蹊大教授
早大在助手	38大岩事件執筆、40早大教授、学術会議副会長、労働法
ベルリソ大哲学生	42ベルリソ大講師、43大使館、45帰国、56訪大、59東大教授
山形高次郎教授	33滝川事件辞任、立命館大教授、38逮捕自白、転向、51南山大
山形高次郎教授	「山高文化運動の父」、33病氣終結、結婚死、独文学
山形高次郎教授	「山高文化運動の父」、1939、近代独逸詩抄、1941、訳者か?
山形高次郎教授	酒出家、伯爵
山形高次郎教授	33モスコワ亡命、爵位削奪、37パリ、41帰国逮捕、新演劇人協会
山形高次郎教授	36新制作派協会、52再渡仏、歌手佐藤美子夫
山形高次郎教授	鶴屋長男、36新制作派協会、46日本美術会、48共產党入党
山形高次郎教授	二科会、46行動美術協会、85毎日文化賞、武蔵野美術大教授
山形高次郎教授	40二科会、78理事長、76芸術院会員、89文化勲章
山形高次郎教授	宮内府研究員 西洋美術批評、59-68国立西洋美術館館長、60長谷川力子大
山形高次郎教授	建築家 コルビュジエに師事、37パリ万博日本館設計、40版倉建築研究所長
山形高次郎教授	相生高工教授 37理学博士、45相生工専校長、49群馬大工学部長
山形高次郎教授	33・5土方、佐藤、坂倉と会う、「世界文化」同人、37執筆
山形高次郎教授	歴史学者
山形高次郎教授	同盟化で活動
山形高次郎教授	留学生
山形高次郎教授	ベルリソ大學生
山形高次郎教授	ベルリソ大學生
山形高次郎教授	トロツキア文学
山形高次郎教授	朝鮮留学生
山形高次郎教授	38中共入党、78中国外務次官、83駐米大使、86-88対外友好協会会長
山形高次郎教授	28KPD入党、長征参加、55駐米大使、中国外務次官、対外友好協会会長
山形高次郎教授	28中共入党、留学、34長征参加、56党中央委員、64-68中日友好協会長
山形高次郎教授	作家、34長征参加、中国人民大学学長
山形高次郎教授	34京城大助手で三宅英化事件、初代民主主義顧問局長、56津浦水滸として蘭清

との関係です。

ベルリンの日本人グループ

本日は「ナチスに抵抗した日本人、ベルリン反帝グループ関係者一覽」というリストを配布しております。私自身の本来の研究とも関係するんですが、私は、「戦後民主主義」はアメリカ占領軍による押しつけか、日本の自由民権運動や大正デモクラシーの伝統の延長かという論争は、不毛だと思っております。「横からの入力」としてのヨーロッパの思想の影響、とりわけワイマール民主主義の意義を、もつと考慮にいれるべきだと考えております。このリストに出ているのは、一九二〇年代の後半から三三年、つまりナチスが政権をとるまでの時期、ドイツに留学していた日本人の学者、芸術家、ジャーナリスト等の左翼グループの人々です。

当時、ドイツの首都ベルリンには、大使館や商社関係を含め約五〇〇人の日本人がいましたが、その中に三〇人ぐらいの左派グループができていました。それに対して、九州大学教授・ベルリン大学客員教授で親ナチの鹿子木員信を中心にした右派グループがいる、その他中間派がいくつかいるという構図で、満州事変のころには、日本の軍国主義化とナチスの台頭のもとで、ドイツにいる日本人の中でも思想的な分岐がありました。私はその中の左派グループを研究しております、このリストを先に説明しておきますと、一番上が「ベルリン社会科学研究会」で、一九二六年末から、主として若手の学者たちを中心になったマルクス主義の読書会があります。これは、もともと関東大震災後に文部省派遣でベルリンに留学した蠟

山政道の提唱で始まったものですが、それに東大の経済学部や法学部から留学している助教たちと、京大の経済学部の関係者たち、つまり東大新人会関係者と京大の河上肇の弟子たちが、日本国内では思想的に相当違うのですが、留学先ではなぜか仲よく、マルクス、エンゲルスやレーニン、プーリンを読んでいた読書会です。この読書会そのものは三〇年代まで続きますが、読書会中心の活動というのは、二八年の三・一五事件を経て二九年いっばいぐらい、ベルリンで続きました。

このマルクス主義読書会の段階では、東大関係で言えば蠟山政道、横田喜三郎、有澤廣巳、土屋喬雄という法学部、経済学部の少壮助教たちがおりました、医学部助教で社会衛生学を担当していた国崎定洞という人物が、私自身がもともと研究している対象です。この国崎が、読書会の中で急速に急進化し、やがて彼を中心一九二八年後半以降、「ベルリン反帝グループ」とリストに書いていますが、もう少し実践的なグループが内部に生まれ、ドイツ共産党日本語部に移行していきます。

京都大学、つまり河上肇との関係で言いますと、最初の読書会の段階から加わっているのは経済学部の谷口吉彦、河上の弟子で高松高商の堀江邑一、山本勝市という当時和歌山高商の助教らです。山田勝次郎は蠟山政道の実弟で、東大を出て当時京大農学部の助教になっていて関係で、両者を結ぶ役割です。途中から法学部の黒田覚、経済学部の八木芳之助、蛭川虎三ら、当時の京大の若手助教で河上肇と何らかの形でつながりのある人たちが、この読書会のメンバーになります。ほかに東大法学部から分かれた九大労働法の舟橋諱一、菊池勇夫らがいます。

後の話との関係で言っておきますと、この読書会は、東大・京大系の学者だけでやっていたわけではなく、もう一つ有力なグループがあります。千田是也——戦後、俳優座の代表になる、日本の新劇の父ですが——が同じころベルリンにおりまして、このグループの中で、非常に重要な役割を果たしました。その千田に従って、例えば映画監督衣笠貞之助やプロキノ俳優岡田桑三までが、一緒に加わっております。一緒に撮った写真もあります。

それから、もう一つはジャーナリスト。当時の朝日新聞ベルリン特派員である岡上守道（黒田礼二）、電通特派員で有澤の旧制二高以来の友人である鈴木東民という、日本の有力な通信社のベルリン特派員の二人も入っています。学者たちと一緒にマルクス、レーニン、ブハーリン等を読んでいました。つまり、当時日本では翻訳を読むうと思っても伏字だらけですが、ドイツでは自由に完全版の原典を読める、しかも日本では共産党は非合法ですが、ドイツでは共産党も合法大衆政党である、そういうワイマール民主主義の雰囲気なかで、戦後の歩みから見るとびつくりするような横田喜三郎や蠟山政道たちまで含めて、後に戦時中の京大経済学部で戦時統制の理論化を担う人たちまで入って、マルクス主義読書会や小旅行、親睦会をやっているわけです。

「ベルリン反帝グループ」のリストの下の方に、新明正道、服部英太郎、杉本栄一、大熊信行のグループがいます。これらの人は、さつき荒川先生からお話のあったルカーチと並び称されるカール・コルシユやアウグスト・タールハイマーという、ドイツ共産党から除名された学者たちを囲んで、別の読書会をもっていました。国崎定洞らのドイツ共産党に近づいたグループ——有澤廣巳などはドイツ共

産党の集会でドイツ語のあいさつまでしています——に対して、自分たちは文部省から派遣された学者なのに、そんなことをすると日本に帰ったら危ないと思つて、やや中立的な立場をとつたのが、新明正道、服部英太郎、杉本栄一、大熊信行らです。その中心になったのは新明正道と杉本栄一で、東京商科大学（現・一橋大学）の福田徳三の門下生が中心になったグループです。

平野義太郎や千田是也らを含む「反帝グループ」の三〇人ほどは、ドイツ共産党の集会などにもみんなで行っているのですが、日本で三・一五事件を見てからやってきた新明、杉本グループは、共産党から距離を置いて、ドイツ共産党を除名されたコルシユ、タールハイマーとつき合っていたという関係になります。

この第一のグループが、一九二八年の後半頃から急進化します。千田是也の父伊藤為吉がもともとアメリカで片山潜と友人であったという関係で、モスクワから国際反帝同盟の会議にやってきた片山潜が、ベルリンに立ち寄る。ベルリンの日本レストランで歓迎会を開く。そういう場で、片山潜と国崎定洞、千田是也らのグループが、非常に親しい関係になります。中でもドイツ共産党員の女性と親しくなつて急進的な思想を持つていた、東大医学部助教国崎定洞が、片山潜と恒常的な連絡をとるようになるわけです。

このグループが、一九二九年になりますと、ドイツ共産党日本語部をつくります。当時の国際共産党、つまりコミンテルンは、在地主義というのですが、日本にいる共産主義者はすべて日本共産党に入る。ですから戦前の日本共産党には、朝鮮人が多数入っていました。ドイツにいる共産主義者は、国籍に関係なくドイツ共産党に入ることになっていました。そのドイツ共産党の中の日本語部の創立

メンバーが国崎定洞と千田是也で、彼らは日本で非合法の日本共産党員になったことはありませんが、合法的なドイツ共産党員であったという関係になります。その指導のもとに、「ベルリン反帝グループ」という実践的な日本人グループがつくられます。リストの下の方になりますが、この段階になると、東大・京大系の学者は帰国し（当時の文部省派遣はふつう二年です）相対的に減りまして、京大の政治学助教授大岩誠、当時京城帝大助教授であつた三宅鹿之助のほか、その後に学者になる人、例えば早稲田大学の労働法の助手の野村平爾らは新たに加わりませんが、むしろ芸術家や当時のベルリン大学の日本人留学生が中心になっていきます。それが「ベルリン反帝グループ」で、読書会だけではなく、実践活動にも加わります。具体的には例えば、満州事変が始まると、当時ベルリンにいた中国人留学生、朝鮮人留学生と一緒に、日本帝国主義反対のデモを組織します。ドイツですから合法なわけです。三二年になりますと、『レボルツイオネーレス・エイジアン（革命的アジア）』というドイツ語の月刊雑誌、アジアにおける戦争の状況とドイツにおけるファシズムの危機を結びつけて、それに反対する雑誌をつくったりします。

その中心的メンバーは、「ベルリン社会科学研究会」出身の国崎定洞と千田是也ですが、そのほかに、文芸評論の勝本清一郎、当時のプロレタリア文学の代表者の一人である藤森成吉夫妻、島崎藤村の息子で画家志望の島崎蕪助、パウハウスの建築を学ぶ山口文象といった文化運動の担い手たち、それにもっと若い学生たち、大体旧制高校で学生運動を始め、日本では警察に捕まりスキヤンダルになるというので、裕福な親が息子が赤化したから危ないというので外国に

留学させた「良家の子弟」たちです。嬉野満洲雄とか名古屋の丸栄デパートの大株主の息子の八木誠三とかいう人たちが、入ってくるわけです。その人たちが中心になって、今言ったような実践活動を行い、同時にこのグループは、モスクワやパリとも連絡をとりました。正確に言いますと、ロンドン、パリ、マルセイユ、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンジェルス、ベルリン、ハンブルグ、モスクワというネットワークが、日本国外の日本人共産主義者の間でできていまして、パリには、ベルリンに次ぐ大きなグループ「ガスパ（在巴里芸術科学友の会）」がありました。そこでは戦後文化勲章をもらう吉井淳二や佐藤敬、内田巖、田中忠雄といった画家たちが中心で、戦後に初代の国立西洋美術館長となる富永惣一や建築の坂倉準三もメンバーですが、このあたりは省略いたします。そのベルリンとパリの連絡係をつとめたのが、大岩誠、野村平爾、大野俊一らの学者と佐野碩、土方与志という後にソ連に入る演劇人です。それから、当時『夜明け前』を執筆中の島崎藤村の息子が二人ヨーロッパにおりまして、次男鶏二がパリで、三男蕪助がベルリンで、共に画家をめざしています。藤村の『夜明け前』の印税の相当部分はパリの次男鶏二のところに送られるのですが、そのパリに三男の蕪助が仕送りのお金をもらうため、ベルリンからパリへ夜行列車で向かいます。そのさいにモスクワ・日本とつながるベルリン反帝グループとパリのガスパ・グループとの連絡文書（レポ）が運ばれることもあつたようです。歴史的・客観的にみると、島崎藤村『夜明け前』は、彼ら左翼グループの活動に貢献しているわけです。

「三二年テーゼ」を河上に渡したのは誰か

さて、河上肇に戻りましょう。当時のベルリンは、日本共産党とモスクワのコミンテルンを結ぶ、重要な中継地でした。当時の日本とモスクワを結ぶ連絡ルートには、それ以前の時期は、上海ルート、朝鮮・満州ルート、ウラジオストック・ルートなどがありまして、コミンテルンの極東指導部及び中国共産党とつながる上海ルートが、一番有力なルートでした。それが、三一年六月の「ヌーラン事件」で変わります。当時上海のコミンテルン連絡員のトップであったヌーランが逮捕されて、モスクワに通じる最重要連絡ルートが切断されてしまいます。そのときに、コミンテルン日本支部である日本共産党とモスクワをつなぐ一番安全なルートになったのが、ベルリン・ルートです。このベルリン・ルートは、三一年から三四年の初めぐらまで、日本とモスクワをつなぐ最有力連絡ルートになります。三三年にナチスが政権をとったところで、ベルリン反帝グループのメンバーの多くが帰国したりドイツから国外追放になってしまおうので、三四年以降はアメリカ・ルートといいますが、野坂参三が切り開くルートに重点が移ります。

その中で、ベルリン・グループの中心であった国崎定洞を通じて、新労農党問題で自己批判した河上肇が、モスクワとの文通を進めます。雑誌や無産者新聞等々の送付、日本資本主義分析のための資料の送付、それから先ほど言った、モスクワから送られてきた「三二年テーゼ」の受理・翻訳を行ったりするので、日本共産党とモスクワのコミンテルン本部の間にベルリンの国崎定洞グループがおり、

日本には河上肇がいて、国崎定洞と河上肇と日本共産党の間にはまだだれかがいる、というつながりが生まれます。このだれかというのが、実は大問題で、その問題を、これからお話しします。

先ほど言ったように、河上肇『自叙伝』は、「三二年テーゼ」は国崎定洞から送られてきたと言っています。つまりベルリン・ルートの存在を明らかにしています。国崎定洞は、本当は二八年に日本に帰国しなければなりません。東大医学部に戻れば社会衛生学講座が新設され、彼が初代教授になるはずだったので、それを拒否してドイツに残った人です（川上武・加藤哲郎『人間 国崎定洞』勁草書房、一九九五年）。そのために、当時のベルリン日本大使館や特高外事警察からはにらまれていきます。河上肇自身も、京大をやめて新労農党にかかわっていますから、当然監視されています。その二人が直接手紙をやり取りすることは、非常に難しいわけです。それを仲介するルートがあったはずですが、

「宮川実ルート」は信頼できない

先に「三二年テーゼ」の方をお話ししますと、モスクワで起草されたドイツ語で初めて発表された「三二年テーゼ」は、私が調べた限りでも、実はいろいろなルートで日本に入ってきています。私が直接聞いたのは、例えば堀江邑一ルートです。堀江邑一は河上肇の弟子で、三二年当時は高松高商教授で図書館長でした。生前の堀江さんから直接聞いたところでは、二八年に彼は帰国しましたが、ドイツから本を輸入できる立場を利用して、ドイツにいる国崎グループから送ってもらった箱入りのドイツ語の本の真ん中をくりぬいて、その中に

連絡文書を入れて、高松高商図書館あてに送らせていました。その連絡文書を、河上肇に直接渡したこともあるし、岩田義道という当時の日本共産党の中央委員に渡したこともあると言っています。この堀江ルートが一つ考えられます。

それから、東大助教だった平野義太郎がいます。「日本資本主義発達史講座」で有名ですが、彼も二九年末までフランクフルトに留学し、ベルリンの反帝グループとつながっていました。ドイツの国崎定洞から平野義太郎に手紙や資料が送られて、それを平野は「日本資本主義発達史講座」の編集プロセスで野呂榮太郎に渡したと、私は生前の平野さんから直接、何度か聞いたことがあります。

もつと安全と思われるルートは、小宮義孝ルートです。国崎定洞は、医学部助教で医者でした。医療セツルメント運動の中で一緒だった小宮義孝という、国崎定洞の後輩に当たる医学者がおりまして、三〇年代初めのこの時期、上海の自然科学研究所に行っています。戦後国立予防衛生研究所の所長となった有名な医者ですが、小宮は一時、新人会を通じて左翼運動に加わり、三・一五事件で共産党が弾圧され自分も検挙されたからは、基本的には政治からは離れたことになっています。しかし国崎定洞とは親友だったものですから、国崎から頼まれて、実はいろいろな資料を日本で受け取っていました。その資料は小宮さんが亡くなって後に手に入ったのですが、それを見ると、二〇年代末に東大医学部助手であった小宮のところに、ドイツ共産党関係の資料が多数送られています。小宮義孝は、それを田中清玄ら当時の共産党関係者に渡していました。小宮が上海自然科学研究所に移ってから、このルートが続いていた可能性があります。

河上肇関係者の中では、先の堀江邑ルートが一番自然ですが、そのほかにあった可能性はあります。宮川実という『資本論』を河上と一緒に訳した経済学者がいます。その宮川実が、一九七九年に出した『河上肇 その人と思想』（学習の友社）という本の中に、自分はドイツのミュンヘンに留学中『資本論』を河上肇と一緒に翻訳していたという話に加えて、「わたくしは、ドイツからインド洋回りの汽船で日本に帰ってきたが、そのときドイツ出発の直前に出た『三二年テーゼ』のドイツ文をもって帰り、河上先生に渡した」と、八五年に亡くなる数年前に言い出したわけです。これについては、岩波版『河上肇全集』の月報で、直ちに堀江邑一が、「宮川君がそんなことを言っているのはなにかの間違いだろう。私が河上先生から聞いたところによると、河上先生は国崎から郵送されたものを使っていたと言っている」と批判していますが、要するに、日本共産党に「三二年テーゼ」を届けたのは自分だという人が何人かいて、宮川実は、自分こそが「テーゼ」の秘密連絡員だったということ、非常に強調しています。

私は、この宮川証言は間違いだと思っています。それには幾つか理由がありますが、この「反帝グループ」リストには、宮川実が入っていません。例えば平野義太郎は、二九年当時、フランクフルトに留学していましたが、読書会があるたびにベルリンに来ていて、他のメンバーの証言もあります。フランクフルトは中継地として便利です。ロンドンやパリのグループとの連絡も務めています。宮川実は三〇年から三二年までドイツ南方のミュンヘンにいますが、ベルリンの読書会や政治的活動に加わった形跡が全くありません。そうすると河上肇との個人的なつながりということですが、果たし

てそのルートが「三二年テーゼ」の伝達に使われたらどうかというのが一点です（本講演の後、宮川が一九三〇年八月ごろ、ベルリン大学付属外国人向けドイツ語学校の第六五クラスに約二カ月在籍し、島崎蕨助と同級だったことが判明したが、最近発見された蕨助の日記・回想録には宮川の名は登場しない、他のメンバーの回想・証言でも宮川の名は出たことがない）。

それからもう一点は、宮川この本全体が、事実関係について怪しいことです。たとえばこの中に、「服部英太郎と新明正道とわたくしとの三人が、コルシユの私宅を訪ねた」と、カール・コルシユとの会見記を二ページにわたって書いています。ところが新明正道は、ベルリン時代の克明な日記を残しています。新明正道と東北大の同僚服部英太郎がコルシユと約十回会っている記録が、日記からはつきりわかります。ところがその同行者は、さつき言いました福田徳三門下の杉本栄一や大熊信行で、宮川実の名前は一回も出てきません。新明日記全体の中に、在独時期は重なる宮川実の名前が、一度も登場しない。宮川はコルシユと会って福本和夫の話をしたと書いています。実際にコルシユと会ったことはあるかもしれませんが、少なくとも服部英太郎や新明正道と一緒にいたというのはウンザろうと私は思っています。ちなみに、その新明正道の在独日記は、宮川実の死後、一〇年ほど前に娘婿の家永三郎さん宅で見つかり、私が解説を書いています（『新明正道ドイツ留学日記』時潮社、一九九七年）。こうした意味で、宮川実の話は信用できない。

もう一つ、宮川は文部省派遣で和歌山高商からミュンヘンに行くのですが、文部省「在外研究員表」という当時の公式記録によると、一九三〇年五月に出発して三二年三月に帰国したとあります。しか

し「三二年テーゼ」は、三二年五月二〇日に出ています。それ以前に三月の「クーシネン報告」など「三二年テーゼ」に戦略転換する理論的な兆候がみられる文章が『インプレコール』等に出たことはありますが、「三二年テーゼ」の原文そのものは、三二年五月発表です。ソ連の崩壊でいまや「三二年テーゼ」の草案まで見られるようになり、岩村登志夫さんがモスクワでロシア語の草案を見つけましたが、そのロシア語草案でさえ四月です。したがって、一九三二年三月に帰国した者が「三二年テーゼ」を持ち帰ることはありえないことから、この宮川実の書いた文章は、私はまちがいだと思っています。少なくとも現段階では信用できません。

それでは「三二年テーゼ」はどうやって伝わったか。この宮川実証言に対する疑問は、一海知義先生が『河上肇——芸術と人生』（新評論、一九八二年）という本の中で、私が紹介したのと同じ宮川の文章を挙げながら、「三二年テーゼを持ち帰った」という話はどうも怪しい、果たして宮川実はいつ帰国したのだろうか、暗に宮川氏を批判する文章を書いています。その一海先生におそわったのですが、河上左京という河上肇の弟がいて、左京のところドイツから多数の文書が送られ、それが河上肇に届けられました。これは左京の息子さんから、一海さんが証言をとってきました。河上左京ルートです。

私もこのルートが、一番可能性の高いルートではないかと考えます。先ほどの上海經由小宮義孝ルートという可能性もあるのですが、小宮ルートだと野呂榮太郎らの方にはつながりますが、河上肇には直接つながらない。おそらく「三二年テーゼ」の直接の伝達ルートは、国崎定洞が、河上肇があて先として指定した河上左京のところ

に送り、河上左京から河上肇に渡って、それが直接か間接かで中央委員岩田義道に渡され、当時の風間丈吉が委員長の日共産党中央委員会に届いたと考えるべきだろうと思います。

しかも河上肇の「テーゼ」翻訳はあくまで下訳で、それに村田陽一が手を入れています。例えば河上肇は「モナーキー」というドイツ語原文をそのまま「君主制」と訳しましたが、それを村田陽一は、それまで流布していた「三二年政治テーゼ草案」に沿って、「天皇制」と訳し直しました。以上のように、「三二年テーゼ」の伝達ルートについては、宮川実ではなく、河上左京ルートであつただろうと思います。

発見された河上肇のコミンテルン宛書簡

ではなぜ宮川実はこの証言をしたのが問題になりますが、晩年の宮川実のドイツ留学時代についての回想は、自分はいかに河上肇と近かつたかということを強調しています。それがコルシユの話であつたり、「三二年テーゼ」伝達の話だつたり、当時の事情を綿密に研究してみると、荒唐無稽なわけです。しかしおそらく宮川川にしてみれば、自分は河上先生と一緒に、実はこの時期に重大な共産党に関わる秘密の任務を果たしていたと言いたかつたのではないかと、私は裏読みしたわけです。

そう思つてモスクワに行つたら、実は証拠があつたというのが、本日皆さんにお渡しした『大原社会問題研究所雑誌』発表の新資料です。詳しい紹介は後でゆっくりお読みいただきたいと思いますが、端的に言えば、「三二年テーゼ」より一年ほど前、一九三〇年の秋か

ら三一年初めの時期に、河上肇がミュンヘンの宮川実にあてた私信が、宮川実からベルリンの国崎定洞のところに、こつそり届けられ、それを国崎定洞がモスクワにいる片山潜に添え書きつきで転送していました。それがモスクワのコミンテルン史料館(旧マルクス・レーニン主義研究所)に、一式資料として、六〇年以上も保存されていました。

これを読むと、おもしろいのは、河上肇は新労農党問題を自己批判してコミンテルンに近づきますが、その近づき方が、必ずしも単純なコミンテルン崇拜ではなかつたことです。宮川に宛てた河上肇の手紙は、署名がなかつたものからです。岩波書店版『河上肇全集』の編集で使つた自筆文章のコピーを幾つかもらい、『全集』を編纂した一海知義さんと杉原四郎さんに筆跡鑑定をしてもらつて、河上肇のもの最終的に判断しました。それが実は、河上肇が日本の共産党を批判した手紙だつたのです。

どういふことかという、河上が述べているのは、コミンテルンの機関紙には日本共産党は大衆化して果敢に戦つているとニュースが載るが、それは日本の現実とは大きくかけ離れている、実際は日本の党は大衆から孤立している状況を率直に認めるべきだ、というのが一点です。二つ目に、当時は武装メーデーその他、日本共産党が田中清玄の指導のもとで非常に極左化した時期でした。その極左的戦術に対する批判が出てきます。三つ目は、労働運動、大衆運動に対する指導が全然なされていなくて、党は空文句ばかり言つてい、これは日本共産党についての正しい情報がモスクワに伝わっていないからだ、だから自分は正しい情報を日本から伝えたいという点で、これが宮川実にあてた河上肇の手紙のポイントです。ただし

モスクワのコミンテルン本部の方を疑うことはなく、日本から正しい情報を伝えれば、モスクワは必ずや正しい方針を出してくれるだろうという観点で書かれています。これが、新労農党脱退から三二年九月に日本共産党に入るまでの時期の河上肇の心境ということになります。実はもう一点、日本共産党に対する疑問を書いています。つまり、そういう怪しげな情報ばかりがモスクワに伝わって、正しい方針がコミンテルンからおりてこないのは、党の中にスパイがいるからに違いないということ、この手紙の中で書いているのです。その河上肇自筆の、日本語の手紙が、モスクワでみつかったのです。

もう一つ重要なのは、実はその手紙は、モスクワの史料館では、五つの手紙がワンセットになってファイルされていました。その五通の中に、ローマ字の、やはり河上肇が書いたと思われる手紙がありました。私の『大原雑誌』論文の中に、資料として写真が出ていますが、おそらく本人は暗号で書いたつもりになっているのでしようが、日本語が読めればローマ字で簡単に解読できる手紙があります。実はこのローマ字手紙の署名が、「本田 (Honda)」となっているのです。本田というのは不思議な名前です、『自叙伝』には自分の党名だと書いているのですが、先に言いましたように「三二年デーゼ」には訳者の署名はありません。『河上肇全集』のどこを探しても、本田という名前の文書は一枚もなかったわけです。ところがモスクワには、本田という名前で書いた手紙が、二通残されていました。ただしそれは日本語ではなく、正確に言うと日本語をローマ字に直したものだっただけです。このローマ字手紙が大変な内容で、それが共同通信配信で一九九八年一〇月一八日付新聞各紙の記事になっているものです。

先ほど言ったように、最初の宮川宛手紙で、河上は、正しい情報がモスクワに伝わらないのはだれかスパイがいるからではないかと話していたわけです。それが、ベルリンの国崎定洞と交信する本田名でのローマ字文書の中で、河上肇は、自分の最も信頼していた教え子の一人がどうやらそのスパイではないかと疑いを持った、と言いだしたのです。それが、「I」というイニシャルしかこのローマ字文書には出てきませんが、『自叙伝』と照らし合わせれば明らかのように、岩田義道という河上の京大時代の教え子の中でも最も優秀だった三一年当時の日本共産党中央委員なわけです。

岩田義道を疑った河上肇

ではなぜ岩田義道を河上肇は怪しいと思ったのでしょうか。『自叙伝』の中で河上は、岩田義道を解党派と疑い、岩田が官憲に虐殺された後にも彼は怪しかったと書いています。その理由が、モスクワの新資料の中に、はっきりと書いてあったのです。モスクワの史料館で、河上肇の手紙は、『国民新聞』——今の『サンケイ新聞』の前身——の記事の切り抜きと一緒にとじ込まれていました。昭和六(一九三二)年二月一日付け『国民新聞』のスクープで、二八年三・一五事件で捕まっていた共産党獄中指導者佐野学、三田村四郎らが脱獄を企てたという記事です。これに照応して、ローマ字の手紙の中で書かれていることは、一九三〇年夏のある日、それまで三・一五事件で捕まっていた教え子のI(岩田義道)が、仮釈放で出てきて河上肇を訪れた。ところがそこで岩田は、とうとうと党の秘密を話し始めた。その秘密の中に、党は現在獄中でも果敢に戦っており、

コミンテルン「河上肇ファイル」の中の手紙
(1931年3月30日)

1.25 127 313 ... 78

78

Desshi "Kokamin" no Kiji wa, sudeni goran ~~gohan~~ no noto to hangaeru; Uka sore ni tsuite no Johō wo haki okuru. — Kore wa Frau Utako to hon-i na Hito kara zettai ni Himitsu to shite hiki totta koto de aru. Hanashi shite kureta Hito wa, kesshite Uso wo yū Hito de nai to shiji te iru.

"Kokumin" no Kiji wa, Uso mo majitte iru ga, shikashi āyū Jitta Jijitsu ga jissai atta no da. Renraku no tame ni dete ki Hito to yū no wa, moto Yakuzaischi wo shite ita mono de, tanin wo Dantai sashita tame Tsumi ni towarete Nyūgoku shite ita mono da. Renraku niō Mokuteki wa, Gokuchū no Dōshi ga Tō no Honbu we Iken wo tū^{ta} uru yōni suru koto, korega Shugan de atta. Mochiron Datsugoku no Keikaku mo atta. Koranshu ga 2 Nin Baishū sarete ita hazuda.

Renraku ni dete leta Ooto wa, naka-naka warui Yatsu de, Nitamura-shi no yōna Hito nara tomokabe, soto ni iru mono dawa naka-naka umaku teikai-honasegu; sonotameni kudan no Ooto wa Achi-hochi de Kōe no ~~shō~~ shibori, tsuini Kōi jū no 1 Gatsu 13 hi ni Keishichō we Jiken wo utta. Sonotame ni Jijitsu ga gutaitehini Teki ni bakuro shita.

Keishi-chō wa kono Jiken wo Yami-hara-Yami-we hōmu-ru kōe ni shita. Sore-sore Kakari no Hito no Sekinin-mon-

幹部の脱獄計画があるというようなことを言った。河上肇は、ローマ字の手紙の中で、なぜこんな党の内部の重大な問題を、自分のような非党員の学者に打ち明けるのだろうかと疑問を持った、という書き方をしています。その後、自分がかわいがっていたI(岩田)は、何度か自分のところにやってきた。そのたびに、党は次に何々をやるといふ、当時の非法機関紙『赤旗』や合法機関紙『無産者新聞』にも書いていないようなことを告げていった。それで自分は、彼は怪しいと思つて、その後会うことをやめた。そして、岩田義道は大丈夫かといふことを、希望閣の主人の市川義雄らに問い合わせた。そちらの方からも岩田は怪しいからつき合わない方がいいといふ回答があり、自分は一切つき合うことをやめた、こんなふうに書いているのです。『自叙伝』では抽象的・一般的に岩田は解党派ではなかったかと書いていたその具体的理由が、このモスクワの手紙の中では、三一年二月にならなければ公表されなかった党指導部の獄中脱獄未遂事件を、自分は岩田義道の仮出獄直後に知ってしまった、と特定しているのです。これが、河上肇の岩田義道告発の根拠だったので。

この日本からモスクワ宛のスパイ摘発をつないでいたのが、どうも宮川実らしいのです。というのは、モスクワのファイルには、宮川実の筆跡の河上肇先生のことを紹介しますという国崎定洞あての手紙が一番初めに入っていて、それとワンパックで、河上肇の宮川実宛日本語の手紙、それから今言つたローマ字の岩田義道の告発状、最後にベルリンの国崎定洞がモスクワの片山潜にあてた手紙が入っていました。その詳しい内容は『大原雑誌』に解説してありますので、読んでいただければと思います。

そこから何が読み取れるかということですが、やはり求道者としての河上肇ということでしょうか。河上肇『自叙伝』は、人の好き嫌いが激しい本で、ここでの岩田義道は、大変かわいそうな役まわりになっています。しかし、率直に自分の心境を語っているという意味では、河上『自叙伝』は、宮川実の晩年の回想などは、とても比べものになりません。それだけ資料的価値もあります。河上は、この岩田義道疑惑について、『自叙伝』に「当時、私はモスクワ方面へ事情を通じるための手紙を出したりしたけれど、その手紙は国崎氏にあてたと思つている。発信者の氏名を明記しないと、こんな手紙は先方で信用されるはずはないが、途中官憲の手に落ちる危険があるのです、それは非常に書きにくかった」それは届かなかつたこと、後日に至つて伝聞した」と書いています。河上は死ぬまでそう思つていたでしょう。しかし本当は、届かなかつたのではなくて、片山潜まで届いていた。その秘密の手紙が、モスクワで私が見つけたこの岩田義道告発状だった、というのが私の解釈です。

思想的に見ると、どういう問題になるか。河上肇は新労農党をやめたところで、コミンテルンの側に立つことを決意したわけですが、けれどもそのあり方は、いわば「あるべき共産党」の姿を彼の理論の方から設定して、モスクワのコミンテルンについては、多分あるべき姿の現実態だと信じている。しかし、日本に現実存在している共産党は、どうもあるべき姿になっていないとなげいている。河上肇にとつての「あるべき共産党」の基準からすれば、仮釈放された岩田義道は、河上を訪ねるべきでなかつた。実は岩田義道は、獄中党中央委員会の決定で偽装転向して出てきて、地下活動を始めて、中央委員にも実際になるのですが、その偽装転向で出てきたこと自

体を、河上は疑っているわけです。自分の愛弟子の、一番マルクス主義を理解し、実践活動にとび込んだ岩田義道が、出獄後すぐに自分のところにやってきたこと自体はうれしい。しかし、非党員の自分に対して、本来、共産党員ならばそんなことは言うはずのない党内の秘密を自分にもらした。だから、こいつは怪しいと感じ、二回、三回会ううちに、ますます疑いを強めた。おそらく岩田の方からすれば、恩師である河上肇を信頼して話しているのですが、河上肇にしてみれば、そんな内輪話を打ち明けられるということ自体がどうも怪しいという、不幸な師弟関係です。そこで岩田義道を遠ざけ、官憲に虐殺されて後も、戦後刊行の『自叙伝』にまで、岩田義道はやはりスパイだったのではないかと書き続けるという態度をとった。

ですから先ほどの、日本共産党批判の宮川実宛手紙と同じで、河上肇の中には、「あるべき党」が強固に存在していて、その党というのは当時の現実の日本共産党ではない。実際は当時のソ連共産党もコミンテルンも、日本共産党と同じく、いやそれ以上に問題は多かつたのですが、そちらまでは疑わない。河上の「あるべき党」「共産主義的人間」は高い水準に設定されていて、そこに認められる人間になろうと目指して、モスクワに届くようにと一生懸命岩田義道告発の手紙を出していたのが、一九三一年から三二年、ちょうど満州事変からナチス政権ができる時期の河上肇だったのだらう、と思われる。

以上で、一応私の話ということにさせていただきます。

第II部 デイスカツション

住谷 どうもありがとうございました。お二人のお話、時間の制限があつたせいいろいろとおもしろい問題を出していただきながら、十分にこれを展開しないままに終わったところも多々あつたと思います。

荒川さんの御報告のフランクフルト学派の場合も、現在、西ドイツの思想家で活動しているハーバーマス等は依然としてその流れに立っております。日本ではソビエトが崩壊して、同時にマルクス主義も信用を失墜して、地に落ちたようになっていきますけど、ヨーロッパで見えていますと、ヨーロッパ・マルクス主義はけっして信用を失墜していませんで、ますます研究が盛んであります。そういう意味でも、マルクス主義というものについての視野をもっと広げて、マルクス・レーニン主義だけに極限されたマルクス主義というイメージをむしろ払拭した方がいいんじゃないかという意味でも、荒川さんのお話は非常に貴重だと思います。

加藤さんのお話も実は、きょうは随分省かれていますけれども、たびたび名前が出ました岡崎さんのことが、むしろメイン・テーマで、それで加藤さんをお願いしたわけです。その方を見ますと、今、最後にちよつと触られましたけど、ソビエトに対する理想主義的

な認識を持っていたイメージ、あるいはそれを加藤さんは共同幻想と呼んでいらつしやいますが、そういうイメージについての期待が非常に強かった。それに対して現実のソビエトがあまりにもかけ離れていたということが、加藤さんの御本を見るとよくわかりますし、その中でモスクワ在住の日本人が、実に自分たちの生存をかけてのどろどろした戦いを展開していく。片山潜、山本懸蔵、その他、野坂参三も含めて展開されているのがよく描かれている。私は読んだ後、何とも言えない気持ちの重さを感じた次第です。そういった側面もきょうのお話の中で随分省かれてしまっていましたので、そういう点も含めて後のデイスカッションのなかでお話を伺えればと思っております。それではパネラーの方たち、古田さん、飯田さんから何か御質問がありましたらお願いします。

古田 河上の、特に昭和初期の時代というのは、河上自身は『自叙伝』でいろいろ書いてありますけれども、それを裏づける資料というのは非常に乏しいのでわかりにくい時代だと思っていました。荒川さんにまずお尋ねしたいのは、マルクス主義というのがコミンテルンによつて代表されるようなマルクス主義、ソビエト・マルクス主義と言つてもいいと思うんですが、それとちよつと違つた西欧マルクス主義の流れがあつて、その二つの流れが日本にはほとんど同時に、大正末期から昭和初期にかけて流れ込んできたと思います。河上に関係ある人というと、三木清とか福本和夫とかという人たちが受けとつたマルクス主義というのは、そういう国際的な流れからいうとどういふふうに理解したらよろしいんでしょうか。

荒川 なかなか的確にお答えできるかどうかわかりませんが、三木清の場合だけで考えてみますと、彼自身が西欧マルクス主

義と言われるものをそのまま読んだり聞いたりして受けとつてきたというよりも、問題意識を共通にしたといえるかと思ひます。当時のドイツでは非常にマルクス主義に関心が持たれていたわけですから、それと同じものを読み、同じ問題を考え、帰つてきたように自身は思うんです。その後の展開を見ましても、三〇年代に入つてきますと政治の技術化、経営行政技術化を含めて、技術の問題から始まりまして、構想力の問題を提起し、そういう新しい社会に対応した新しい人間像の必要を説いているわけです。それはヨーロッパ・マルクス主義がマルクス主義に狭く限定されないパスペクティブを問題にしていたのと非常に共通していると思うんです。

古田 さつき、マルクス主義自体が単なる経済学じゃなくて、哲学の再認識といひますか、そういう方向が二〇年代、三〇年代に出たきたというお話でしたけど、それは日本の場合、福本や三木などを通してマルクス主義の哲学的側面というのが強く意識されたんだらうと思うんです。河上もそれから哲学を勉強しようと言ひ出すわけですけど、その場合にコミンテルンのようなマルクス主義が日本の場合、急に強くなりますね。僕はいわゆる「弁証法的唯物論の哲学」というのは非常に体系的にできていて、あれは急に体系化しちやつたためにかえつて硬直して、西欧マルクス主義の方は分散した形でしなやかな面が残つていたと思うんですけど。日本の唯物論研究会は、ソビエト・マルクス主義の影響で少し硬直化した面がありはしませんか。

荒川 マルクス自体の思想の理解の仕方については、たとえば初期の『経済学・哲学草稿』あるいは『ドイツ・イデオロギー』にしても、あれが一般に読み得るようになるのは、一九三〇年代の初め



▲住谷一彦氏

ぐらいです。ですから、それまではマルクスをそういう目で見るというの一般的なじゃなかったんだらうと思われるわけです。それがある程度行われていたというのは、やはりドイツに伝統的な哲学、つまりまたルカチ流に言えば、トタリテート（全体性）といいますが、人間精神というようなものを統合するような弁証法を考えなくてはいけないという哲学的な、ドイツ哲学の伝統があったから、初期マルクスというものを知らなくても、ヨーロッパの伝統に結びつけられるようなしなやかな理解ができたんだらうという感じがします。

古田 特に社会思想の前提に人間像の問題があるんじゃないかというところで、河上の場合にイギリス的なクリスチャン・ジェントルマンというのがあるんじゃないかと。それが求道者に結びつくんじゃないかというお話を最後にちよつとされていましたが、そのイギリス的教養ということの連関というのは、河上はイギリス経済学をかなり勉強していると思いますが、それ以外に何か。

荒川 やはり彼が山口の高等学校に入るような青年期には武士的、儒教的なものをたたき込まれていた。実はそうですけど、明治以降に入ってきたイギリスのジェントルマンの人間像は、その士という観念と非常に共通する面が多いんです。明治初年には、明治四年にスマイルズの『セルフ・ヘルプ』『自助論』を中村正直が訳しました。それから、明治一一年だったと思いますけれども、やはりスマイルズの『キヤラクター』『西洋品行論』が訳される。これは福沢諭吉の『学問のすゝめ』とともにベストセラーになって、随分読まれているんです。それからいろいろなジェントルマンとは何か、ジェントルマンたるものはいかに振舞うべきかという礼儀作法の翻訳本あるいは翻案本が、文部省を始めとしているんな人によつて出されている。それがみんな非常に読まれているわけです。

イギリスから直接というよりむしろ、アメリカを通じての方が影響が大きかっただらうと思いますけど、例えば徳富蘇峰らの熊本バンドを生んだ熊本洋学校のジェーンズでしたか、彼はアメリカのウエストポイント士官学校出身ですけど、そこはイギリスの有名なパブリックスクールの教育方針を取り入れているわけで、そういう意味でジェーンズの教育は紳士教育です。一九世紀以降のイギリスのパブリックスクールの教育精神については、ヒューズの『トム・ブラウンの学校時代』が明治三〇年代半ばに翻訳されて、パブリックスクールの教育というものが日本の明治期には非常に影響があった。そういう意味で紳士という概念はいろいろな形で浸透しているわけ



▲古田光氏

です。漱石だって、イギリスには武士という語はないけど、紳士という語があつてこれはとてもかなわないと『倫敦塔』に書いたりしています。大体、明治期はそういう意味で、昔の山鹿素行流に言えど大丈夫という士たるものというのがあつて、それとジェントルマンが結びついて、非常に影響を持つたと思います。

その後、入ってくるのがドイツ流の教養人で、明治三〇年前後に多くの人がドイツに留学して、ドイツ流のシステムを、教育システムも含めて取り入れる。近代的なドイツ流の教育をもとにした学校の卒業生が活躍しはじめるのが明治四〇年前後で、これで一応日本の近代の最初の段階が確立される。その頃がドイツで一番教養とは何かということが論じられた時代で、それがドイツ哲学とともに輸入されて、桑木厳翼、左右田喜一郎の文化主義の唱導となり、それ

とともに教養が強調される。教養という言葉自体、いつから使われたかはあまりはつきりしませんが、明治の半ばごろは文学的修養、修養という語句があつたわけですが、四〇年代以降になりますと教養となつてきます。それと社会思想のあり方というものが非常に関連していると思われるわけです。

古田 一つだけ加藤さんにお伺いしたいんですが、河上が岩田義道にいろいろ疑惑を持つて、コミンテルンに告発するような手紙があつたということは、河上の個人的な資質に由来するものなのか、それとも当時のコミンテルンの雰囲気というものの中にそういう猜疑的な雰囲気があつたからだというふうになるのでしょうか。

加藤 実はさつき五つの手紙ということで紹介した中に、もう一通ありまして、それは国崎定洞が片山潜にあてた手紙でした。河上馨の手紙を片山潜に届けるにあつての、国崎定洞の添え書きです。ここで国崎が片山潜に添え書きしているのは、河上馨が言っていることは本当だろうか、彼は本当に新労農党から離れてコミンテルンの側についたであろうかという観点から、河上馨を人物評価した手紙です。そこで国崎が片山に言っているのは、河上が手紙の中で述べていることは片山潜に伝えるに足る信憑性があるということですが、それをチェックして、ベルリンのドイツ共産党日本語部責任者国崎定洞は、モスクワのコミンテルン幹部会員片山潜に転送する、という関係になっています。

モスクワの方では、一九三〇年代初頭は、後の三六く三八年の大粛清期ほどひどくはありませんが、既に二〇年代のトロツキー批判が終わつて、今やブハーリン批判を遂行中です。歴史学のポクロフスキー批判、哲学のデボリン批判等々に入っていく時期です。特

に日本については、二八年三・一五事件、二九年四・一六検挙と大弾圧を受けていて、そこで生き残っている日本共産党からの連絡文書に対しては、非常に警戒しています。検挙されれば官憲に屈した疑いがあるし、検挙されなかったならスパイの疑いがあるわけです。ですから、媒介者である国崎定洞も、手紙を送ってきた河上肇をも一応スパイと疑った上で、モスクワに回すべきか否かを検討します。国崎定洞は河上肇の手紙を、「純情」という書き方で評価しています。「この純情は信じていいだろう」と言って片山潜に転送します。

今後の日本との連絡のために、日本での階級闘争の中で、河上肇のような人物は重要な役割を果たしうるのであるから敢えて送るといふ添え書きつきで、モスクワに送っている。そういう意味では、ベルリンでもモスクワでも、あらゆるものを疑ってかかる疑心暗鬼の雰囲気前提にして、読まれ送られているのです。

河上肇自身も、岩田義道が怪しいという話を書いています。これはモスクワやベルリンから見れば、素朴な疑い方です。年若い教え子の岩田義道が、恩師であるということと彼の知り得た党の秘密を打ち明けたのでしょうか、河上肇にしてみれば、共産党員は、たとえ師弟関係にあつても、年齢が離れていても、そんなことは話すべきでない。河上にとつての「あるべき党」からすれば、本当の党員は絶対に脱獄計画などは打ち明けるはずがないということと疑つた、という関係です。ですから、河上也疑心暗鬼になつてはいませんが、これは当時の共産党の実体を知らない、牧歌的なレベルです。しかも『自叙伝』では、モスクワに伝えるための手紙は非常に書きにくかつたという。よほどすい暗号文が出てくるかと思つたら、日本語をただローマ字に変換しただけで、本文の筆跡はどうも秀夫

人で自分では書いていないのですが、しかし「本田」の署名だけは自分で書いている。これは、河上肇の書いた英語やドイツ語の筆記体と照合し、岩波編集部と一海さんと私で、間違ひなく河上だと判断しました。ですから筆跡をごまかしたりしながらも、本格的暗号文での連絡はできない。いわば探偵ごつこのレベルです。これは当時のコミンテルン世界を覆つていた、もつと深く隠微な、人間の本質まで疑つた方がいいような疑心暗鬼、後に展開する肅清への動きに比べれば、極めてまだ初歩的・牧歌的です。国崎定洞の「純情」という評価は、相当に正しいと思います。

ここからはフロアからの御質問にも一緒に答えることになりました。河上にコミンテルン幻想があり、共産党幻想があり、「あるべき党」が非常に高く設定されていた、と言いました。けれどもそれは、河上肇においては素朴な形であり、国崎定洞や堀江邑一、あるいは宮川実も、実はみな共産党幻想の中にあるわけです。彼らの場合は、もう少し計算しているでしょう。例えば河上の手紙をモスクワに送るとしたら、誰に宛てたらいいだろうかと考える。モスクワでは片山潜が読むのか、山本懸蔵が読むか、野坂参三がいいかと考えるはずです。ちようど野坂が病気を理由に保釈されてモスクワに潜行する時期なので、野坂参三が読むかもしれないということまで計算しなければとても送れないような手紙を、河上は、平気で国崎に送っているわけです。国崎は、自分が最も信頼する片山に送る。

ついでに言いますと、実は、河上肇が岩田義道を告発する手紙を送つたのと全く同じ時期に、日本共産党が公式にコミンテルンに送つた、一九三一年四月の日本共産党報告書があります。風間文吉以下の中央委員会が、これは上海ルートで、中国共産党を通して送つた

ものが、偶然ですが時期的に同じなものですから、モスクワの史料館では、五通の河上肇ファイルの次に保存されていました。これには本格的暗号文も出てきます。『非常時共産党の真実——一九三一年のコミンテルン宛報告書』というタイトルで、法政大学『大原社会問題研究所雑誌』二〇〇〇年五月号に、私は解説文を紹介しています。

この公式報告書を読むと、知識人のことは、ほとんど出てきません。いかに日本の労働者は果敢に戦っているかという報告書になっています。風間丈吉が委員長、スパイM松村こと飯塚盈延、岩田義道、紺野与次郎が中央委員の時期です。この時期の現実の日本共産党では、河上肇の本の印税が、重要な財源になっていました。当時の日本共産党は、三一年のコミンテルン宛報告書でも、毎月の經常財政が二千円でした。河上は『自叙伝』で見える限り、五百円単位のカンパをやっています。彼が数回カンパすれば、大体当時の日本共産党の經常経費がまかなえる規模です。その後、三万円を狙った大森銀行ギャング事件が起こって、河上肇の娘も、義弟大塚有章も巻き込まれます。

ところが当時の日本共産党からモスクワへの公式報告書には、そういう話は一切出てきません。まさに河上肇が素朴に批判していたとおりで、労働者階級の前衛党であるわが党は、労働者階級の比率を高めて八幡製鉄に二つの党細胞をつくったとか、川崎のメーデーではプロレタリアートが武装して警官隊と対決したという類の誇大報告です。現実の日本の運動では、プロレタリア文化運動や河上肇のような知識人の役割が、大変重要でした。党員はわずか数百人なのに、例えば『戦旗』という文芸雑誌は数万部出ている。一九三〇年から三一年の『非常時共産党』というのは、実は戦前の日本共産

党史上、党勢が最高潮の時期で、特に知的・文化的影響力が大きかった。にもかかわらず、そういうインテリや文化運動のことは、公式報告書にはほとんど書かれていない。もつぱら非合法の『赤旗』と『無産者新聞』がどのぐらいうる労働者に行き渡ったかという報告です。

つまり、共同幻想は、コミンテルンに対する共同幻想、日本共産党に対する共同幻想のほか、労働者階級に対する幻想もあります。党指導部の方は、要するに河上肇にしる、国崎定洞にしる、宮川実にしる、インテリからカンパをもらうことと、もつぱら秘密連絡ルートを安全に確保するための存在という形で考えている。その意味では、河上肇ばかりではなく、当時の左翼知識人全体が純情だったと言えらるると思います。

あといくつかフロアから具体的な御質問がありますので、ついでに答えておきます。岩田は河上に疑われているとは思っていないか、たか、という質問です。岩田義道は、何度か河上宅に行くうちに、実際に出入り禁止になります。その段階では、どうも河上先生は自分のことを疑っているようだと、わかったらと思うと思います。そのポイントが、偽装転向か本当の転向かという問題です。事実としては、先ほどの三一年の日本共産党公式報告書に「同志鳥羽」という名前で、獄中中央委員会が同志鳥羽を新しい任務のために出獄させたという書き方でできまます。つまり岩田の釈放は、偽装転向だったわけです。だから岩田義道は、河上先生は自分が本当に転向し解党派になったと思われたんだなあと、多分寂しく思う立場にあったわけです。かといって、実は私は偽装転向ですなどという話をしたら、ますます河上肇から疑われるという、不幸な関係になっていると思います。

宮川実のウソは、密告の媒介者たる後ろめたさを隠すためか、岩田義道や河上肇をかばうためか、あるいは単なる自己顕示欲かという質問ですが、私には自己顕示欲以外に考えられません。この宮川実の国崎定洞宛の河上紹介の手紙は、おそらく共産黨員としての使命感で出したものであろうと思います。新労農党をやめてコミンテルンを信頼し始めた河上肇を、コミンテルンでいわば名誉回復させたい、というのが宮川実の狙いだったと思います。しかしそんなスパイ告発の仲介を自分が昔やっていたとは、戦後になっても言うわけにはいかない。そこで「三三三三三三」や福本和夫の話まで入れて、いかに自分はドイツ滞在中も河上先生と緊密な関係であったのかと語る。それはおそらく、長谷部文雄、小林輝次、堀江邑一その他、河上肇のお弟子さんたちの中での一番弟子争いと関係があらうと思います。河上肇が一番信頼していたのは自分だったと言いたかつたのではないかと、私は思っています。

最後に、「三三三三三三」の翻訳者は本当に河上肇でしょうか、あれは長文ですし一晩で訳したといっている、村田陽一氏が和訳したという真相はどうか、という質問です。この点は、ほとんど決着がついています。というのは、『自叙伝』には事実関係での相当大きな間違いがあります。先ほどの本田訳もそうですが、こういう書き方になっています。「テーゼの原文は一九三二年六月二五日付で発表されているが、その日本語訳は早くも七月一〇日の『赤旗』特別号として頒布されたのである。それには本田弘蔵訳としてあつたはずだ。本田弘蔵、これが私の地下の党名である」と。

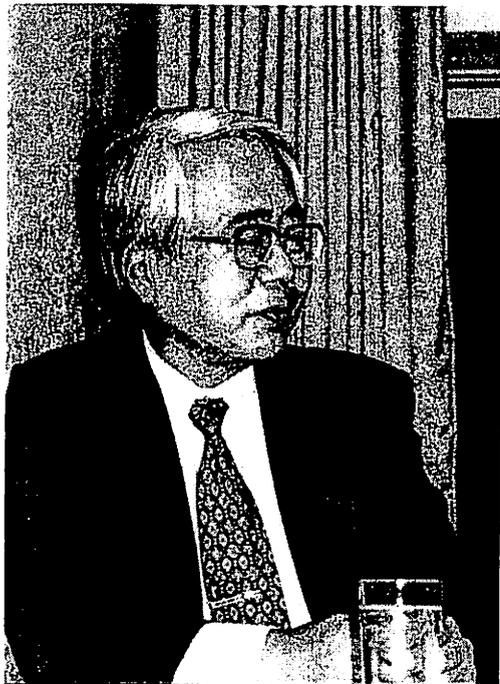
事実としてまず、原文は六月二五日に出たわけではありません。五月二〇日のドイツ語版『インプレコール』で、五・一五事件の報

道と同じ号です。翻訳の日付の方は正しく、七月一〇日付け『赤旗』特別号に発表されます。ただし六月二八日付けで、共産党内のプリント出版が出ていたようです。いずれにしろ一カ月以上あるわけです。問題は、当時のベルリンから日本までの交信期間です。郵送だと、シベリア鉄道で大体二週間で、遅くとも二〇日ぐらいで着くみたいです。南回りの船便はさらに長いのですが、つまり五月二〇日にドイツ語で公式に発表され、それが三週間以内に着いている。その後一〇日ぐらい翻訳期間をとつても、六月末ないし七月一〇日に十分まにあいます。ですから河上の叙述をうのみにせず、事実と河上の叙述を照らし合わせれば、河上肇が翻訳したのは間違いないだろうと思います。それが一晩でできたかどうかは確定できませんが、この点を私は、村田陽一さんから直接聞いたこともあり、村田氏も、岩波版『全集』の月報に『三三三三三三』翻訳のころ」を書いていました。相当急いで訳したものが送られてきたけれども、それは間違いなく河上肇のものであつた、それを自分は手を入れて完成したと、書いています。そこでは理論的には、村田陽一の方が重要な役割を果たしたと思います。先ほどのモナーキーの河上訳「君主制」を「天皇制」と訳し直したのは、戦後の歴史学などに与えた影響から言えば、決定的です。そういう意味では重要ですが、下訳は河上肇であつたし、そのことを河上肇は、おそらく死ぬまで誇りにしていただろうと思います。ですから、七月一〇日付け『赤旗』の日本語訳の訳者はだれかと言われれば、私は、論文に書くときには「河上・村田共訳」としています。ちなみに村田陽一は、その後雑誌『インタナショナル』九月号に発表するときは、村田陽一単独訳を出しています。けれども最初の『赤旗』訳の方は、河上訳と言っ

てもさしつかえないと思います。

住谷 ありがとうございます。それでは飯田さん、よろしくお願いたします。

飯田 最初の方で出ましたヨーロッパ・マルクス主義の持つ意味というお話で、それは同時に二〇世紀マルクス主義というか、そもそも思想における二〇世紀的状况というのは一体どういふことなのかという問題と関係してくると思われまふ。二〇世紀を思想的にどうとらえるかという場合に、一つやはり最大の問題として今の時点になつて見えてくるのは、ハンナ・アレントの言う全体主義の時代というものを切り開いたということじゃないかと思うわけです。アレントの場合には早くからスターリン主義とナチズムというものを同列に全体主義としてとらえるという視点を出していったわけでは



▲飯田泰三氏

が、それは彼女自身のユダヤ人としての受難の経験というものから提起した。その全体主義を一番特色づけるものは何だろうかということを考える場合の、いわばキーワードになるようなものがアレントの著作でいうと、たしか一番最後の章が「イデオロギーとテロル」という章になつていたと思いますが、「イデオロギーとテロル」の結合、そのテロルという場合には先ほどの肅清の話、強制収容所の話、スターリン裁判やらスパイの査問の話というふうな一連のものと結びついていくという中で、その辺まで持つてくると、前半の荒川先生の話と加藤さんの話と重なる部分が出てくるような気がするということをまず感じました。

そして、その中でもう一つ鍵になるものが、荒川先生の話にあつた「大衆」といふものの登場、いわば二〇世紀に入つて大衆社会状況というものが成立しているという問題です。つまり一九世紀的な階級状況が一方では先ほどおっしゃっていたように、いわゆる身分状況で、それとの関連で教養人とか知識人とかの問題が出てくるというお話だったんですが、それと大衆社会の成立というものが重なってくるわけですね。つまり、二〇世紀に入る時点で知識人と大衆、あるいはエリートと大衆、あるいは前衛と大衆という二分法が表に出てくることになるわけです。

そのことがまさにルカーチがいろいろとらえたような組織論という問題が、マルクス主義の中で大きな意味を持つていふこととかかわると思ひますし、さらには、そもそもレーニンの党の理論というものの中心が、目的意識性を持ったエリート前衛集団と、自然成長性にとどまつてゐる大衆という対比、その中から党の理論ができてくると。そういう問題が、実は日本の年号でいえば大正の終わり

から昭和の始めのところで一斉に押し寄せてきたと。そういう印象を非常に強く持つわけです。そして、昭和の初期の政治学者とか知識人の中では、当時、全体主義という言葉が非常に輝かしい未来を指し示す言葉として出てきている。そういう状況の中で、河上が、いわば単なる経済学者からマルクス主義者へと歩みを進めて、日本共産党さらにはコミンテルンにかかわっていくという中で生じているのが、きょうのお話だったんじゃないか。

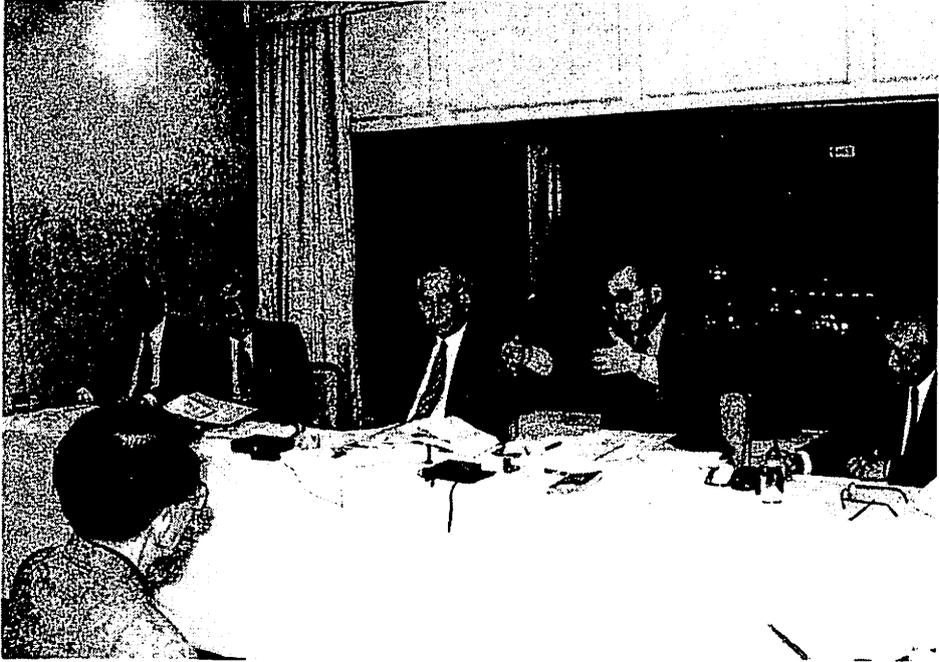
それで、荒川先生の最初のお話の中で、ルカーチ、マンハイムという話が出てき、コルシユというものが三木、福本、その辺に大きな影響を与えている状況、それは大衆教養主義から出発した知識人たちが、そのマルクス主義を展開していくという状況と重なっているというところで、これはどういうふうな問題に絞っていったらと思うんですが、そういうことを感じながらお二人のお話を伺っております、そんな認識でいいのか。スターリン主義の問題というのも、単にマルクス主義から出発したマルクス・レーニン主義が、いわば後進ロシアで墮落したというか、おくれた形態意識と結びついたり、社会状況と結びついたりしたというだけでは、問題を、今の知識人と大衆とか、あるいは階級状況から身分状況へという展開と重ね合わせてみると出てくるんじゃないかというふうなことを感じるんですが、その点をお二人から一言ずつお考えを伺わせていただけたらと思います。

加藤 私からは、いわば知識社会学的に、お答えすることにします。先ほどの共同幻想に近い話で、これは飯田さんのご専門の丸山真男研究の世界で、丸山真男、大塚久雄、川島武宜らのいわゆる近代主義者たちは、なぜ西欧市民社会をあんなに理想的に描いてしまっ

たのかという類の批判があります。つまり、現実にはヨーロッパにあつた近代社会とは違うものを、しかし理論的には非常に純化した形で、いわばあるべき市民社会、あるべき自立した個人の像を描いたという話があり、その理由づけとして、都築勉さんは、それは留学体験がなかったからだという、おもしろいことを書いています。つまり、戦前は東大では助教教授になるとどこかに留学することになっているし、留学する場合には、大体ドイツを中心にしていました。そうすれば、現実のビュルガーリツヒエ・ゲゼルシャフトを見て体験できなかったはずなのに、丸山たちが学問の道に入ったときには、丸山、大塚、川島の三人に共通していますが、ちょうど日本が世界から孤立して戦争に入る時期であつたために、留学できない。そこで理論的に、文献から頭の中で西欧市民社会を純化する。逆に言えば、そのことによつて理論的に洗練された市民社会像をつくりえた、という説明があります。

ではその前の時代はどうだったのかといいますと、私は、一九二〇年代半ばで一回変わったと思います。文部省の「在外研究員表」が、明治八年から記録が残っています。明治八年一人、明治三八年一七人派遣で在留者計八五人、大正初めが年四〇人で在留者計約一〇〇人、この頃から大体、帝国大学の助教教授になつて一年か二年たつたぐらいの人が行く形になります。ところが関東大震災後に急増します。昭和三年は一五七人派遣、大体二年滞在ですから当時の在留者が四二三人です。昭和八年ぐらゐまで毎年一五〇人から二〇〇人を文部省は派遣していて、震災前の倍になります。一九二八年から三一年が最高です。

学科別では、大体三分の二が理科です。技術、工学、医学等で、



▲討論風景

残りの三分の一が文科ですが、これが実は、大学別の割り当てがあります。ピーク時の一九三一年の例で言いますと、東京帝大が一番多く二四人、京都帝大一人、東北帝大、九州帝大、北海道帝大が一緒で各九人。つまり、東大三、京大二、その他旧帝大という割合です。その後には大阪帝大二、東京工大四、東京文理大四、東京商大三、金沢医大三等々とあつて、あとはいわゆるナンバーズスクールです。旧制高校からは、これは全国一律に、大体年一人です。

行先は、ドイツが在留者の半分以上で、訪問先まで入れると八割近い。一番ポピュラーなパターンは、ドイツに長く滞在し、イギリスに数か月寄つて、帰路にフランスかイタリアかアメリカに行く、というパターンです。ドイツに直行するか、ロンドン経由で入るかなどの分かれはありますが、ドイツは大体文部省派遣者の八割の行先に入っています。つまり、当時の世界のアカデミズムの最先端ということになります。

そういう行先からもわかりますが、福本和夫、三木清、村山知義らの留学は、二〇年代前半なわけです。帰国してドイツの最新思潮を紹介すれば、それがそのまま日本の流行思想になる。しかし震災後は、今度は数が多いので、受け手の選択肢も広がる。大正帝国大学の先生は洋行して帰ると、洋行中に勉強した最新事情を講義するのが当たり前という形になってきます。関東大震災から三〇年代の初めまでは、全国の大学で、その時点でのヨーロッパの最新思想が若い講師により講義されている状態です。それが、満州事変から国際連盟脱退、日独伊防共協定・三国同盟へと進むプロセスで、留学はドイツも含めて難しくなり、留学生の数もどんどん減っていきます。丸山真男の時代、三〇年代後半になると、今度はほとんど行けなく

なる。わずかに限られた人だけがドイツに行く。そういう知識社会学的な転換が、僕は一九二四年前後、三三年前後にあつたと考えています。そのそれぞれの時代に、日本にどのような形でマルクス主義を含む西洋思想が入ってきて、どのような影響を与えたのかを考へるべきだと思っています。

UCLAのシルバーバーグさんという女性研究者が、『中野重治とモダン・マルクス主義』という本（平凡社、一九九八年）を書いていますが、あの手法です。つまり、イタリアのグラムシ、ドイツのベンヤミンと同じような問題設定が日本になかったかを見ていくと、中野重治の詩につきあたるといふ形で、思想の世界性・同時代性を問題にするような視角です。そういう形で思想の越境を見ていくときに、それを連結するものとして、ナチスに追われたユダヤ人の亡命の問題はよく言われますが、日本については、私は留学という問題にもっと注目し、留意すべきではないかと思っています。

荒川 一言つけ加えますと、大体一九三〇年以降になりますと、ドイツにはめぼしい思想家というのはいくらも残っていないわけです。ハイデッガーをとつてみてもナチスの黨員になつたわけですし、ヤスパースは結局いても公然とは発言できないというようなことになつていく。ソンバルトにしろ何にしろ、そういう意味では留学して何か新しい得るべきものというのは、みんなイギリス、アメリカに流出していたという現状があつたんじゃないかと、今のお話にちよつとつけ加えますとそんな感じがするわけです。

そして、日本と関連して考えてみますと、そして大衆という問題と関連してみますと、御承知のように、大衆社会あるいは大衆文化という問題は、批判的に提起されているわけです。大衆は困つたも

のだというネガティブな問題としてとり上げられている。なぜそうなるかというところ、それを問題にしているのはドイツの教養人と言われるようなインテリゲンツであつたわけで、その人たちの目から見ますと、まさにそういう大衆というのはドイツ文化を危うくする。

あるいはさらに言えば、人間の文化を単なる文明、日常生活の利便に墮さしめるものであつて、人間の本来的な文化というものを破壊するといふ観点で問題にしているわけです。オルテガ・イ・ガセツトの『大衆の反逆』という本は、一九三〇年に世に出されておりますけれども、わがままな、要するにどうしようもないというイメージです。そういう意味で大衆という問題が出てくるのは三〇年代とナチズムと関連して出てくるわけですし、先ほどの飯田さんのお話と関連して言えば、例えばハンナ・アーレントの全体主義という理念は、やはり官僚制的統治とテロ、強制収容所の存在というものが、ソビエト全体主義の存在というものの不可欠の要因になつていふというイメージがあるわけです。

その官僚制などいろいろな問題から言いますと、ウェーバーの影響の範囲というものは、もう少し考えてみる必要がある。マルクスがウェーバーか、あるいはマルクスとウェーバーという問題提起は、レーヴィット以来いろいろとあるわけですが、まさにその問題は今日なお、やはり問われている問題だと思つております。ですから二〇〇三〇年代の問題の結実というのはいちよつと後になつたというように言えるかと思ひます。

住谷 どうもありがとうございます。まだいろいろと話は尽きないと思ひますけれども、きょうの公開シンポジウムは一応これで終わりにしたいと思ひます。

きょうのお二人のお話の中で、荒川さんが最後にマックス・ヴェーバーの名前をちよつと出されましたけど、マックス・ヴェーバーが『職業としての政治』の中で、政治におよそかわろうとする者についての条件として出した根本問題が、有名な心情倫理に対する責任倫理の問題でした。きょうの加藤さんのお話で、河上肇の岩田義道に対する手紙がコミンテルンに届いたということで、もし岩田義道が生きていて、ソビエトに亡命していた場合にどうなつたらうかということは加藤さんも話しておられます、そのときに河上の手紙がどんな役割を果たしたかということになると、これもやはり責任倫理の問題とすれば結果責任をどう考えるかという問題にかかわってくるわけです。そういう意味でもきょうのお話の中でマックス・ヴェーバーが提起した心情倫理の問題（加藤さんは河上の純情というふうに表示されましたが）は、やはり加藤さんのおっしゃられた亡命知識人、あるいは日本の知識人の行動のいかんを評価する尺度設定の仕方というような問題になつてくるかと思つてお聞きした次第です。

きょうは、長い間どうもありがとうございました。

（あらかわ・いくお／東京経済大学名誉教授）

（かとう・てつろう／一橋大学教授）

（いいだ・たいぞう／法政大学教授）

（ふるた・ひかる／横浜国立大学名誉教授）

（すみや・かずひこ／立教大学名誉教授）

二〇〇〇年十一月十七日 東京河上会公開シンポジウム

於／神田・学士会館

新渡戸稲造と河上肇

— 日本農政学の系譜 —

住谷一彦

報告

河上肇先生は『日本尊農論』で一躍文壇に躍り出たわけですが、私も河上先生のものを読んで、最初に印象が深かったのは、『日本尊農論』だったので、それ以来、ずっとそれは心のどこかにありました。

たまたま先日『朝日新聞』を読んでいたら、村の数が一万二〇〇〇あったのが、今は、村としては六〇〇ぐらいになってしまっ

たと。それは市町村合併によって、自然村が組み込まれてしまうという形で、村そのものがなくなってしまったというわけではないでしょうが、村としては三、三〇〇ぐらいあったはずなんです。それが減ってきていることは間違いないですね。そして、食糧の穀物の自給率が二〇%を切るというようなことが書いてありました。その後、別の資料で目に入ったのを見ますと、一九八〇年代でしようか、さっきいましたように三、三〇〇あった自然村が二、〇〇〇ぐらいに減っていました、それが二〇一〇年以降になると、さらに二、〇〇〇からその半分以下になるのではないかと、いうぐらい落ち込んできているというニュースがありました。そうしたら、その後、これは西南の方のある県なんです、その県の県知事が、食糧の需要で到底追いつかなくなってきているので、これまで県内で生産していた小麦を、南米のブラジルでしたか、そちらの方にお願いで、そちらの日系人に耕してもらって、それを輸入するという